

# ある乳幼児虐待 —その家族関係と心理療法について—

An Early Child Abuse : Its Familyrelations and Psychotherapy

庄 司 ユリ子

## はじめに

現在は家族関係の在り方に多くの困難を有する時代である。その困難さの際立った現われでもある「家庭内暴力」では、子どもが親に狂ったように向ける暴力があるが、最近では「児童虐待ホットライン」(大阪)・「子どもの虐待110番」(東京)ができるなどして、実の親が子どもを虐待するという事態が一般の人々にも知られるようになってきている。

本稿では、「乳幼児虐待」のケースをとりあげ、「家族関係学」の立場からその家庭内の状況因を考察し、家族問題についての一つの資料を提供する。なお、このような報告が可能であるために用いた「心理療法」という技法について、「臨床心理学」の立場から「乳幼児虐待(加害者)の心理療法」の過程を記述し、ケース研究報告とする。

1. 児童虐待について
  - 1) 児童虐待の実態
  - 2) 児童虐待の対策
2. 症例 ある乳幼児虐待
  - 1) 概 要
  - 2) 面接経過
  - 3) 考 察
    - ①カウンセリングの経過
    - ②予 後(その後の家族関係)

## 1. 児童虐待について

### 1) 児童虐待の実態

1990年4月、全国で初めて大阪で開設された児童虐待防止協会が「子どもの虐待ホットライン」として電話相談を始め、翌年5月、1年間に寄せられた相談のまとめが発表された。相談件数708件、「自分が子どもを虐待している」という人からの相談は534件、その他が虐待を目撃した人や、虐待された子どもからの相談であった。相談をした加害者のうち20代から30代が計386人でその9割以上が女性であった。全体では、母親が子どもを虐待したケースが83.5%であったのに対し、父親は13.5%、兄弟や祖父母による虐待もあった。この報告の中で、子どもの生命に危険があると協会が判断したものが19件もあった。

ところで、児童虐待がどれくらい起こっているのであろうか。日本では、児童虐待の実態把握の気運が高まってきたのは1980年を過ぎてからで、1983年に厚生省の委託を受けた児童虐待調査会による福祉・医療両機関の調査から得られた数を基礎にして推計されたのは、年間1,000件くらいであった。1989年に発表された全国児童相談所長会の調査では、児童虐待が年間2,000件とある。この調査の内容は、4月から9月の半年間1,039件で、保護の怠慢・拒否391件(37.6%)、身体的暴行275件(22%)、心理的虐待68件(6.5%)、性的虐待48件(4.6%)、登校禁止28件(2.6%)であった。このほか保健所、病院、学校、地域などで発見されながら児童相談所に報告されないものや、傷害致死事件になって処理されたもの、さらに未発見のものもあるであろう。いずれにしても、その実態は家庭内の密室の行為であることから、表に出た数字を遙かに上回るものであろう。

児童虐待のとりえ方は国によってもさまざまで、実態にも対応にも大きな開きがある。

イギリスの民間団体「児童虐待防止協会」が調べた1989年の実態は、「虐待の恐れがある」と登録されていた子どもが3,589人。うち実際に虐待された子どもは2,118人、60%にのぼっている。内容は身体的暴力が987人、性的虐待が621人、放任が280人、精神的虐待が112人、発育不良が44人、これらの複合的な虐待が83人と報告されている。同年の旧西独での虐待件数は年間約3万件で年々増えているという。また、アメリカの「連邦児童虐待防止協会」の発表によるものでは、1989年に240万人の子どもが、親かそれに代わる保護者に虐待を受けているなどの報告がある。児童虐待の多いアメリカでは、医療、福祉、警察関係者などは、被虐待児を発見したときは報告しなければならないが、そのために図解つきのやさしい発見の手引書が発行されている。

児童虐待は、どこの国でも年々増加している状況だが、これが深刻な社会問題であり続けたアメリカなどと異なるわが国では、これまで児童福祉の現場のみに任されていた問題であった。

児童虐待も「貧乏社会型」の虐待に代わって「文明型」の虐待が増加している実状から、日本でもその防止対策は一般に及ぶ重大な社会的課題であるといえるだろう。

家庭科学研究所では、1991年3月研究誌「家庭科学」で「家庭環境と児童虐待」を特集している。この中で、「児童虐待と母子保健活動・育児援助活動」の筆者内藤和美は、1984年末から1987年にかけて児童虐待の実態を医療の場で全国調査を行い、この調査を基にして児童虐待の発生予防について論じている。

この小児科調査の加害者について、虐待も放置も約65%が母親である。父親は虐待では20.8%、放置で3.6%、両親での虐待が11.9%、放置で23.2%である。同じ虐待・放置でも、児童相談所の調査では加害者父親が過半数を占めているので、医療と福祉では異なる対象を扱っていることが解る。小児科調査では、虐待・放置の問題を起こしている家庭の家族構造で目立つのは、多子家庭（全国平均1.7%に対する21.0%）と一人親家庭（全国平均約2%に対して13.5%）が多いのである。

内藤和美は、小児科調査と児童相談所調査を比べ、結局のところ加害者となる者は母親が多いのか父親が多いのか定かでないが、重要なのはどちらが多いかということよりも、それぞれわが子を虐待に追いこむその状況であるとして、その状況について次のように分析している。母親の場合には、①子どもと相対する時間の長さや密度の濃さ、②「育児は母親の責任」という強い社会通念、③「良き母親」のイメージ（母性神話）などが思い浮かぶ。一方父親の場合には、①男性の暴力を容認する文化、②「育児は母親の任務」という社会通念のもと親となる準備がされないまま、あるいは、親としてのアイデンティティが希薄なまま親になる。③子どもとのかかわりの中で親として育っていく体験の希薄さ、などを考えることができるかも知れない。さらに、調査で「虐待・放置と関連したと考えられる要因」を指摘してもらったところ、「経済的不安定」と「夫婦の不和・不仲」がともに1/3以上の事例で指摘されていた。

内藤和美は、以上のような状況をまとめて、「母子保健学」の立場から予防・対策を次のように論じている。「虐待されたり放置されたりした子らとその家族・家庭には、未熟児、多胎児、望まぬ妊娠、一人親家庭、多子家庭、夫婦不和、経済的不安定など、いくつかの際立った特徴があった。親が自分の子どもを虐待したり放置したりするようになるまでには、時には親自身の生育歴にさかのぼる問題をも含め、多くの要因の複雑な積み重ねがあったものと思われ、短絡的に、個別特定のことがらとの因果関係が論じられるべきではない。ここでは、このことに十分留意しながら、先に挙げたようないくつかの要因を、親子関係の成立・展開にとって不利な条件としないためにどのような援助ができるか考えてみたい。先の際立った特徴を見直してみると、それらは、①妊娠・出産に関する要因（未熟児、多胎児、望まぬ妊娠）、②育児に関する要因（未熟児、多胎児、一人親、多子）、③家庭内状況因（夫婦不和、経済的不安定）と3つに分けることができる。ここでは前2者に絞って論を進めることにする。」

以上に見るように内藤和美は、その予防・対策について論ずるに、「家庭内の状況因」を除いている。筆者は、内藤を除いた「家庭内の状況因」にかかわる一事例の報告をするわけだが、内藤の分類した3つの状況因は、「家庭内の状況因」において重複関連する内容があるため、たいへん貴重な論文としてとりあげ、参考にさせていただいた。

## 2) 児童虐待の対策

乳幼児・児童虐待に関して、これまで被虐待児に対する処置としての保護や治療はかなり考慮されてきているが、子どもが保護された後の加害者である親たちへの指導とか治療面での対策はたいへん遅れている。このような虐待の問題を扱った成書や論文報告はすでに少ないとはいえない。これらの研究内容を見るに、児童虐待事例報告は、分析の少ない外観の報告が主たるものであったり、被虐待児が中心の対処事例であって、加害者についての分析的報告は特筆に価するほど稀である。これを見ても、加害者側の指導や治療がいかに難しい問題であるかが伺われる。東京都の児童センター顧問上田弘之は、「子どもを虐待した親の4割は、自身もまた子どもの頃虐待を受けていたという。虐待は世代的に連鎖するといわれていることから、福祉、医療、法律などの壁を越えてこの鎖を断つ努力が必要である」と語っている。上田の言う「鎖を断つ」ということは、具体的にいうと、まず被虐待児に対する保護と共に、心の傷を癒すことがあげられるだろう。それにしても、児童虐待は一回のみでなく、何度も起りやすいということはすでに知られていることであるにもかかわらず、加害者の側の対処はほとんどできないのである。

福島章は、精神鑑定を通して観察する機会を得たことから、実子虐待致死事件の母親の精神病理を主にして、精神分析的視点から考察した貴重な事例を報告している<sup>1)</sup>。福島は、「子を殺した母親の心理機制をみると、幼児虐待も単に現代社会の生んだ非人間的現象とか、母性性の変容というジャーナリスティックな観点からみるだけでは不十分であり、人間性の根源についての深刻な考察を必要とするように思われる<sup>2)</sup>」と述べている。この事例の加害者の家族背景を見ると、父系母系とも軍人、医師、判事などの多い家系であった。わが国での子どもの虐待においては、発達途上国にみるような貧困とか、教育程度が低いということでもない加害者が増加しつつあることからみて、子どもを虐待する親を単に異常人格者であるからというのではなく、心を病んだ状態にある者としての療法処置、それも福島の説くように、人間性の根源にふれるレベルでの治療を必要とすると思われる。

なお、池田由子・成田年重は、「被虐待児処置の問題点<sup>3)</sup>」のなかで、「親の精神病理が関係する場合は再発が起き易いこと、警察が関係したような傷害のひどい場合でさえ、親権が強いため第三者は親の引き取り要請に対抗しえないこと、虐待事例の治療や追跡が困難であること<sup>4)</sup>」を明らかにしている。また、池田由子は、「児童虐待と援助」について、「児童を虐待

する親への治療と援助はなかなか難しい。筆者は、わが国の関係者だけでなく、米国、英国、オーストラリア、カナダ、北欧、アジアその他の関係者と話しあう機会を持ったが、残念なことにこの仕事が難しく、落胆させられることが多いという点で全員の意見が一致したのであった。虐待を行った親が、自分の問題を自覚するのが治療のはじまりだが、現実には、一部の神経症的な親を除いては、そのようなことは稀である。多くの親たちは自分が不適切な取り扱いをしているという認識を欠いている。第一その日その日を暮らすのに精いっぱいなのである。この意味で虐待の加害者は、自分を病気と思わない病人にたとえられる<sup>3)</sup>。」と述べている。ここでも、子どもを虐待する親に二種の状況があげられており、一つは多くの「貧乏型」、もう一つは親個人の精神病理や家族病理からくる、いわゆる「文明型」ということのできる加害である。わが国で多発しつつある子どもに対する虐待は、さしずめ「文明型」であろう。

「文明型」にあたる神経症的な加害者の場合は、精神医療や心理臨床で救うことが可能であるが、それとあわせて、加害者をめぐる家族関係の調整も必要であろう。しかし、その症例がほとんど報告されていない状況はどうしたことであろう。察するに、神経症的な加害者に心理治療を受けさせることを阻むものがあることや、これを救う機関の存在を知らないことにも理由があるように思われる。これは、社会の急激な変化と共に、臨床心理の実践家に対する社会の期待が高まってきて、各相談施設における来談数の増加状況は、うなぎ登りに高まってきているものの、実状として、社会の必要に応じるといえる状態に至っていないという、社会面での対策の遅れがあるといえるだろう。この点について、河合隼雄は、「臨床心理学の先達たちが、その発展のために努力を続けてきたが、わが国のアカデミズムの社会の変化に対応する姿勢の固さという弱点のため、臨床心理学を社会の必要性に応えるものとするのは、なかなか困難であった。この点に関しては、まだまだ十分とは言えず、われわれは一層の努力を続けてゆかねばならない<sup>4)</sup>」と語っている。

最近開設された「子どもの虐待電話相談」に相談を寄せた母親たちは、姿を現わすことなく悩みを訴えている。そこでは、しかるべき相談機関を紹介されているであろうが、現実にどのような対応が為されているのか、加害者対策の遅れが思われてならない。筆者が「乳幼児虐待の心理療法」を行い、その事例を報告する許しを得たことは、現在でも稀なことであったといえるだろう。

注

- 1) 福島章・金原寿美子「幼児虐待の一精神鑑定例」『現代のエスプリ—被虐待児童候群—』No206 至文堂、昭和59年、pp.80~92  
(金剛出版刊『季刊 精神療法』第5巻第1号昭和54年1月刊所収、のち金剛出版刊 福島章著『犯罪心理学研究Ⅱ』昭和59年2月刊に改訂、収載された)
- 2) 同上、p.91

- 3) 池田由子・成田年重「被虐待児処遇の問題点」【現代のエスプリ—被虐待児症候群—】  
No206 pp.151～163  
(国立精神衛生研究所刊【精神衛生研究】26号 昭和55年3月刊 所収)
- 4) 同上、p.154
- 5) 池田由子「児童虐待 —ゆがんだ親子関係—」中公新書829、昭和62、p.168
- 6) 河合隼雄「特別号発刊に際して」【心理臨床学研究】vol9、誠信書房、平成3

## 2. 症例 ある乳幼児虐待

### 1) 概 要

この心理臨床の症例は、実の子である乳幼児に対して、叩く、抓るなどの暴力をふるってしまった若い母親M子の病んだ心を癒し、子どもを引き取ることができるようにすることを中心課題とした症例である。

M子は、妊娠して7ヶ月の頃、双生児早産のきざしがあり、即入院、絶対安静となり、ベッドに釘づけ状態となる。注射、注射、天井を眺めるだけの毎日が出産まで続いた。そして、1989年7月中旬陣痛の苦しみも自覚できない超難産の後、1週間ほど意識が戻らず、病室であり得ない所から覗いている人の姿を見るなど、幻覚を何度か体験している。産後の日立ちもよくなく、産後2ヶ月で退院した。M子の実家の母は入院手術後で体が弱く、また夫の実家の母は、後少しの停年までの仕事を続けなければならなかったため、生まれた双子は市立の乳児院に4ヶ月預けることになった。M子にはすでに第一子の男子があり、この出産時は女の子が欲しいと思っていたが生まれた子を見た時は、自分に似ていなくても涙の出るほど可愛いかったという体験があった。再度の出産では、一卵生双生児であったが待望の女の子が産まれても、会いたいという思いは全く無く、子どもを見に行くようになっても愛情は湧かず、社会の目を気にして面会に行った。面会の最初は、ああこれくらい大きくなったのかと確認するぐらいで、可哀想という気も起こらなかったが、そのうち、顔を見ると血が逆流し、イーツとなって首を締めたくなった。自分で異常だと思い、なんでこんなになるのか、悩んで悩んで心身ともに疲れ果てたという状態になった。医療にかかわった医師たちや、身近の人に、「憎らしい」という言葉は使えなかったが、思いを込めて訴えても、「すでに一人育てているのだから、自分の産んだ子なんだから、そのうち愛情を持てるようになるよ。」という以外の応答は、どこからも得られなかった。子どもが泣いたりすると自分が何をするか恐ろしい。精神科に行くが、薬をくれるだけで悩みを扱ってもらえない。発狂しそうな思いがして、抵抗のある占いにも行

ってみた。M子はこのようにして、周囲の誰からも理解されない苦悶状態で、わが子を迎えた結果、乳児に暴力をふるうことになった。母親の暴力をふるう姿を見ている唯一の男の子は、父親の前で、「ベチッ」「ベチッ」と言いながら赤ちゃんを叩く。この父親は、女の子や弱い子をいじめるような子になってはいけないと、その都度きつく叩いて「痛いやろ、やったらあかんで」と叱っているが、それが母親の真似とは気づいていない。こうしたある日、夫が勤務で不在の時事故が起こった。頭を強く叩かれて失神した赤ちゃんを抱え、茫然としていたM子は、運良く訪れた実家の両親に発見され、赤ちゃんは病院に運ばれた。後遺症を心配されたが、半年後に漸くこの心配から解放された。

M子の実家では、これからどう対処すればいいのか相談先に困った折、M子の妹が筆者を紹介した。この妹は、筆者が授業の中で家族問題を扱った際、家族相談および心理療法をしていることを話していたので、それを思い出しての窮余の一策であった。双子はやがて、M子の父親が尋ねたI市の福祉事務所を経て、H県の児童相談所の指導を受け、乳児院に改めて保護されることになった。児童相談所では親権を楯に安全の確認ができないまま子どもたちが引き取られていくケースが多いことから、再度の入院に当たって、M子の父親に、「2年間はいかなることがあっても預ける」という誓約書を提出させている。

改めて、初診時のM子をめぐる家族状況を見ておこう。M子<sup>マコ</sup>25歳、高卒。感受性が鋭く直截的な行動をとりやすいが、クールな一面をもつ。夫のF<sup>フミ</sup>夫28歳、高卒。大会社工場で三交替の勤務。優しいが決断力が無い。S男<sup>スミ</sup>2歳4ヶ月。一卵生双生児5ヶ月余のA子とB子。A子は神経質などころがあり虐待の直接の対象となった。この子たちの出産後、手が掛かるのにと夫は反対したが、M子の飼いだめた犬P太。住居は新婚当初、社宅マンションに住んだが、後に2軒続きの2DK新築平家に移る。車あり。M子の実家は、車で10分ほどの位置にあり、父と母と妹がいる。兄は結婚して別居。父は美容院経営、趣味として小さな画廊を持つ。子煩悩であるが「自由と責任」を教えた。父方の祖母は、養子の夫と離婚した財産家の跡継ぎ娘で、人の好き嫌いの激しい人であった。母はこの姑に長年仕え、初回面接時は手術後で病弱であった。

M子が優しい人として選んだ夫の実家は、徒歩で15分くらいの近距離にある。祖母、父と母、独身の姉の4人家族。F夫の兄と弟は結婚して別居。父は過去にアルコール依存症になったことがあり、現在定職なし。母は一家の経済を支えるため勤めに出ていたので、子育ては姑の役割となる。母と子の関係より祖母と孫、特に祖母と姉の結びつきが強い。母は10歳で父親を亡くし親戚をあちこちしたという体験から、「家族ぐるみ」を大切にしたいという思いが強い。長女が一家の取り締りをしているが、母はこの姉を敬遠気味である。M子も、この姉と性格が合わないのと、最も苦手としていた。

ところで、臨床心理の専門分野では、必要のない前置きだが、ここでは心理療法について若

干の説明を加えておく。心理的援助の具体的技法は、さまざまな理論的立場や考え方があり、それによって技法も数多く開発されている。セラピストとしての筆者の用いる心理療法は、面接の中で主として「夢分析」を用いるが、ときに芸術療法の一つである描画法を併用する。大学の研究室でのカウンセリングでは、夢分析と箱庭療法を併用している。

「夢分析の創始者フロイトは、夢は無意識の願望充足であるとしたが、現在では、夢は夢を見た人の精神生活を、全体的に表現すると認識されている。すなわち、夢はクライアントの症状の意味、問題の中核、パーソナリティ、対人関係のあり方、援助者（臨床心理士など）との関係を表わすものである。したがって、夢分析の場合、夢の報告に対して、どこに焦点を合わせるかが、技法上の鍵となる<sup>9)</sup>。」このように、夢はクライアントの心の内面を实によく語ってくれるのであるが、この技法を使いこなすためには、相当長期の訓練を必要とすることもあって、一般には、独立して技法として使用するのではなく、心理療法の全体の方針、運営のなかに特殊な技法として適宜使用される場合が多い。夢の意味は多義的であるので下手をすると、心理的問題の重いクライアントの動揺を大きくしたり、状況を悪化させたりする場合があるからである。筆者の場合は、夢分析の研究を始めて30年になる。ユング派の教育分析を受ける機会を得たのは、かなり後の1982年のことであるが、その時、夢分析のための自身の夢の記録はNo2944になっていた。心理的問題の重いケースも、「夢分析」を用いて効果がある治療体験をしてきているのだが、要領として、夢を上手に見てもらおうお手伝いをして、夢の持つ治癒力を用いているのである。いうなれば、「クライアント自身が自分を癒す」ことのお手伝いである。

言葉で表わせない心の深層の状況、無意識の領域を夢によって語らせる夢分析法は、投映法の一つであるが、同じ投映法に最近わが国の心理療法でたいへん効果をあげているものに「箱庭療法（サンドプレイ・セラピー）」がある。箱庭療法は、ロンドンの小児科医M・ローエンフェルトによって創始され、後にスイスのドラM・カルフが発展させ、1965年に河合隼雄によってわが国に紹介され、発展したものである。筆者の夢分析法も箱庭療法も、共にユングの分析心理学を理論的基盤としており、特にイメージで表現する象徴体験によって、内的な心の変容を重視する治療技法である。意識的自覚が無くとも、心の内界を表現していくうちに、心の問題や体の問題が解決されていくので、始めは子どもに対して開発された箱庭療法だったが、大人にも適応することが解り、現在では国際的な研究交流も年々盛んになっている。

当症例において、最も効果が期待できるのは、夢分析法であると判断し、これを用いたものであるが、面接の初回と終了時は、大学の研究室を用いたので、箱庭を作ってもらった。なお、この症例の記述で、重要な夢を記すのだが、夢の量が多く、夢の意味もたいへん深いので、詳しい分析は極く一部しかできない。すでに述べたように、夢も箱庭のように表現されていくだけで効果があるのだから、夢そのものを読んでいただければと思っている。

この心理療法は、1989年12月下旬に初回面接、以後夫の三交替勤務やS男の保育のこともあ



って、面接は毎週というわけにはいかなかったが、月に平均3回、翌年6月2回、7月2回、8月1回、そして、10月初め第24回面接で終了した。この間にM子の見た夢の数は309であった。1回のカウンセリングの時間は、一般に50分とされているが、夢の多いこともあって、平均3時間という破格の長時間になっている。その時間は、印象として50分位のもので筆者もM子も共に苦痛に思ったことは一度もなかった。

M子は過去に、自分の不注意で、飼犬に噛まれ大怪我をさせたペットのハムスターを、獣医の所を駆けまわって手術をしてもらい、奇形になったが一命を取りとめた後、命の終るまでの1年間大切に育てている。そのように生命を大切にするM子だったが、わが子に暴力をふるったことで、「精神病とか、異常性格者ではないか」という不安を感じた周囲の人々から、いろいろの動きが出てきた。そこで、カウンセリングをスムーズに進展させるために、要所要所でM子にかかわる人たちの面接、または電話によるカウンセリングを行った。心の治療を行うには、クライアントの身近の人達の協力が必要であり、それは、「家族関係」の調整としての課題でもあった。

心理療法の終了後は、家族問題・夫婦問題を、不定期に相談を受けることがあった。乳児院に預けられていた双子は、受け入れの準備もあって、心理療法の終了した翌年の6月末、母親M子の許に引き取られた。双子の生後満2年の誕生日間近い頃であった。

## 2) 面接経過

### 第1回面接 (12月20日)

夫婦で来室。M子は華やかで小柄な体に白い毛皮の半コートを着ていた。すでに子どものあるお母さんという生活感は全くなく、都会の娘といった感じがした。電話で状況の大意は聞いていたので、補足的に話を聞く。次に箱庭を作ってもらう。その間にF夫は電話をかけることがあって部屋を出た。そのときM子は次のように語った。「F夫の家族が、私たちの家にズタズタ入ってくる。F夫は、何かあればお母ちゃんに買ってもらったらいいと、実家に依存することが多い。それは止めてほしいと何度言っても、私の気持ちの解らない人。そのうち子どもができて子どもが可愛くなり、F夫の実家のほうのことは捨てても、この子があればいいと思うようになった。子どもが可愛くて、可愛くて、S男は私の宝、生き甲斐です。」と。

F夫が戻ったところで今後の対応について説明する。まず、M子は異常人格者などではない。出産前後の心身の苦痛から、一時的に心の深層に葛藤、混乱が生じ、母性が正常に機能しない状態になっていると思われる。M子には、夢分析による心理療法を行うとして、何故このような方法をとるかについて説明する。次に、作られた箱庭の診断によって、F夫に対して、M子がことを起こしたのは、M子だけの問題ではないようだ。F夫の実家の人たちとの関係が、

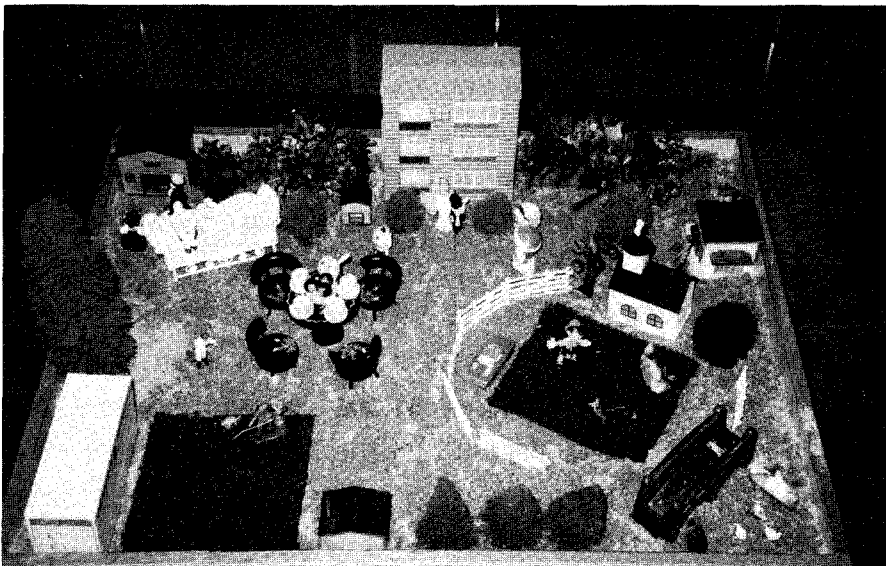
M子にとって大きなストレスになっている。1日も早く赤ちゃんたちをM子の所へ戻してあげるために、この心理療法を巧く進展させる必要がある。F夫にとっては辛いことだろうが、M子を入院隔離させたと思って、刺激を与えないために、M子が治るまで実家との交際を断って、M子をイライラさせない配慮をしてほしい。今一番M子を守ってあげることのできるのはF夫なのだから、夫として、父親としての努力が大事であると説明する。

この時、A子は病院に、B子はM子の実家に居た。赤ちゃんたちは、できればM子の実家で預かってもらえないか。今は愛情が感じられなくても、お母さんの顔だけでも覚えてもらえるような環境が用意されることを期待したい、ということで面接を終わる。

### 面接初回時のM子の箱庭 (写真1)

この箱庭にはM子の現状が語られている。M子はこの箱庭を題して「毎日の生活・私の居たい場所」としている。M子は箱庭を作りあげる終わり頃に、「海とか川とかがほしいのだけれど。」と呟きながら、橋を手にとって箱の右下斜めに置いた。見えない川に架けられた橋だった。この橋から、箱の左上から右下に流れている川を想定することができる。この川の流れる上に、M子の生活が語られていた。祝福されて結婚したM子(上中央)は、「自分たちの家庭」を作ろうとした(左上)。けれど赤ちゃんに暴力をふるうなど、とんでもないことをしてしまったM子(白い長椅子に座る女は、右腕に包帯を巻いている)。わが家の団らんは夢になってしまった(人のいない食卓)。私(男の子を守る犬)はS男だけが可愛い。白い柵で囲まれたわが家。もうそこには姑たちを入れさせるわけにはいかない。と、箱庭は語っていた。これは聞くまでもないことだったが、「この箱庭の中に、あなたがいるとしたらどれですか。」と尋

写真 1



ねた。M子は柵の中にいる男の子に対する親犬を指し示した。柵の中に3匹の子犬もいる。これはF夫と2人の赤ちゃんであろう。M子の家は、教会を使ってあり、赤屋根の上に白い十字架が立っている。柵の中は、M子の聖域ともいえる深い次元の表現である。右上寄りにはF夫の実家、下ほぼ中央にM子の実家もある。左下の建物は学校で、「今は休みなので庭の芝生の手入れをしている男がいる。」と、M子は説明した。これは、目下理性は休業中。しかし、M子はかなり知的に判断できる一面を持っていることを表現している。橋の袂に亀、そして水鳥もいる。

(12月21日)

夕方6時頃、M子の母親から電話が入る。「今後M子たちにどうしてやったらいいのか、親の在り方を教えてほしい。娘の異常に気づいて以来初めて安心した。けれど、F夫はまだ状況がのみこめないようで、あちらの親に話す機会があったのに、大事なことを何も話していない。これではどうなることか。娘は"もう別れてもいい"と言っている。」筆者は「F夫の実家のほうには、こちらから話しましょう。」と答えたが、待ち切れなかったのか、M子の母は直接F夫の実家に申し入れをしたようである。夜8時頃、F夫の母親から電話が入った。「あちらの親から、あなたの家のほうが悪いと言われた。そのことで納得できないふしがある。いったいどういうことなのか尋ねたい。私は勤めに出ていて、子どもたちを姑に頼んでいたの、祖母と孫の関係は、母と子の関係より深いところがあるような思いをさせられた。子どもを愛すること、嫁を愛すること、孫を愛することが何故いけないのか。」と。筆者は、「愛することは悪いはずがない。けれど、相手の立場、相手の心を考える必要があるのではないか。現在はお母さんの育った時代と違ってしまっている。自分たちの家庭を夫婦で作っていかうとする。年輩の者からすると、気になるところがたくさんあると思うが、2人の家庭作りのプロセスを見守ってあげてほしい。助けてほしいということを断れと言っているのではない。今はとりあえず、M子の心を癒して、赤ちゃんたちを引き取れるようにしてあげることが優先しなければならないので。」と、一時的断絶状態を依頼した。F夫の母は、「私も勤めており、若い人のことは多少知っているつもり。」と、一応納得された。個人の心理療法でも、背後の家族問題と深く関連しているので、この場合も早速、M子の周囲の人たちの関係調整が必要になってくる。

第2回面接 (12月28日)

M子は夢分析について、これまで夢を見ることはあったが、セラピストのいうように、そんなに夢を見ることのできるのかと多少不安気味だった。しかし、早速No1～7の夢を記録して持参した。M子は時々だったが日記をつけていたので、夢を記録することにさほど苦痛はないようだった。

夢1 (12月21日)

学校の表のような所に女の人がいる。その人は背が高くオカッパ頭、その後ろに私が立っている。女の人は空に浮かんでいるクリスマスツリーのキラキラモールのような円型の物を、手を伸ばして取ろうとしているが、その瞬間倒れてしまい、脳内出血を起こしてしまう。その女の人はものすごく大きく、もともと少し知恵遅れのような人だった。その横に少し年老いた母親らしい人が一緒にいた。

注（以下コメント） M子も横長のオカッパ頭。背が高く大きい女と、後ろに立つ私とは、行動する私と、それを見ている私、つまり、どちらもM子である。「自分たちの家庭」という夢を手にいれようとしたM子は、失敗して倒れてしまった。頭のなかを怪我したのは、わが子のA子であるが、A子と、頭がおかしくなったと思う自分をだぶらせている。少し年老いた母親らしき人とは、M子の無意識内に存在する元型としてのグレートマザーであり、現実に関連付けていえば、母親的にM子を守ろうとするセラピストであろう。初回夢は、現状を語り、今後の見通しを語るが多い。M子がセラピストを受け入れ、信頼することは、これから始まる心理療法を、スムーズに進展させるための基本的条件である。

#### 夢2 （12月22日）

私と、私がいじめたいタイプの女と、もう一人対等な女の3人がいる。私はいじめたいタイプの女をめちゃくちゃに暴力などでいじめている。紅白の勝利を予想することがあって、そのどちらかを言い走っていく。対等な女の後を、私といじめた女と一緒に追っていく。辿りついた場所に昔の人の死体がある。その死体は大きな箱に入っていて、顔は埴輪のようで、怪我をしているものすごい大男だった。死因は脳内出血らしい。私はそれについて説明を受けている。その時の私の服装は、コートを着ているが、下にブルーの編み込み模様のセーターを着ていた。このブルーのセーターを着ていたことが印象深かった。

注 夢に登場した3人の女について、健全な女の後を追って走るいじめっこの女M子、いじめられっこの女A子。この暴力沙汰はどういう結果になるのだろうか気にしている。夢1に出てきたものすごい大女に対して、ここではものすごい大男の死因が脳内出血であった。この時点では、暴力を受けた乳幼児A子の後遺症の有無は不明であった。M子は意識では、このことを全く思わないでいるが、無意識内では、頭を叩いて失神状態・仮死状態にさせたことを、ものすごく気にしていることが解る。なお、この夢でM子に強く印象を与えたものが、脳内出血のことでなく、身に着けていたブルーのセーターだった。それは何故だろう。M子にとって青色こそ意味のある色だった。青は神秘の色、人間存在の原点の色、不安と理知を表わす色といわれる。自然を描き出す青は、海の深さ、空の無限の高さの色であって、それは、人智のおよばぬところを表現する。それは、M子の不安と祈りを表わす色故に印象深かったのであろう。

#### 夢4 （12月24日）

学校の教室のような所で、昔好きだった男の子（手の届かない存在のように思えて話をしたことはなかったが、頭のいい子だった）に、自分は今、こんなものが欲しいというようなこと

を話している。何日か後にその男の子から、真っ白いエプロンとマフラーをもらい、とても感激した。夢からさめても嬉しくて仕方がない。

注 自分の身につけるもので役立つものを、とても手が届かないと思ったところからプレゼントされた。それは、自身の深みから得たペルソナの補強を意味する。折しもクリスマスイヴの日の夢。

#### 夢5 (12月25日)

私とF夫と2人で、本当はこの家を買いたかったねと話しながら、その前を通り過ぎていく。その家は、海の中に張り出した埋め立て地に建つ家だった。

注 実家から独立し得ないF夫だったが、M子はS男を中心とする生活が維持できれば幸せだった。そこで、夫の実家から遠ざかろうと考え、実際に家探しを始めていた。海はあらゆる存在の母胎として、生命を生み出すグレート・マザーの象徴。箱庭作りでも海にこだわっていたM子だったが、自分に母性性の問題があったからであろう。ここでの家は「自己」の象徴。

#### 夢6 (12月27日)

不安で逃げている自分がいて、ふと気がつくとなんとなくエレベーターの中にいる。3階からエレベーターで下りているが、2階がすごく怖い。怖い人が来るので慌てて家具と家具の間に逃げこんでいる。

注 1階に下りることは、着地することで、地に接する現実の生活を営むに至るまでのプロセスに、何か恐ろしいことがあるようだと感じているM子は、まだ不安そのものと対決できないで逃げている。

#### 夢7 (12月28日)

今日妹が車を買った。2人で乗っていて、ガソリンスタンドでガソリンを入れようとして止まっている。

注 妹はM子の健康な部分という意味を持った分身。これからの夢の道行きに、新しい車を手に入れエネルギーを補充している。車は「自己」の意志で運転するものを表わす。ユングのいう「自己」は心の全体性であり、心の全体の中心としての自己であって、これからの運行にそなえてエネルギーを充足しているといった意味がある。

以上、初めて持参された夢を通して見ると、心理療法を受けるM子は、その準備が整ったと判断することができる。

#### F夫の面接 (12月29日)

これからM子を支えていかねばならない立場にあるF夫としても、いろいろ言い分はあるであろう。F夫単独面接の意図は、F夫に対しても理解を深めておくことと、これからの生活についてのアドバイスにあった。

F夫は次のように語った。たしかに親に近付き過ぎた。始めのうちはいろいろ言っていたが、

そのうち、それもいいというようになってきたようだ。自分も小さい時、母がどこかへ連れていくのによく付いて歩いた。他の兄弟たちは、大きくなってきて嫌がったが、僕はついて行くのに努力した。買い物など母が来て一緒に買ったりが、M子は次第に「あれもらって来て。」というようになった。S男が僕の実家に溶け込んでしまうのを嫌がり、「なんでお父さんまで来るんや、煩わしい。」とも言っていた。母はS男だけを異常に可愛がっているのではない。「他の兄弟たちにしてやっていることをお前が見ていたから、同じように一所懸命にやってきたんや。こうなったら私はいいよ。」と言っている。M子は低血圧で朝が駄目な人。10時か11時頃起きる。自分は朝6時頃から起きて、出勤するときは、食事をしないので起こさないようやっていた。喧嘩の原因に、家事をするしないの問題がある。結婚するときは手伝うと言ったが、それは状況の問題だと思う。休みの日に協力してくれとか、ご飯を作っている間、風呂に入っている間子どもを見てくれ、洗い物をしてくれと言うのならそれもするが、自分も会社で危険な仕事をしているので、帰ってから家事を手伝ってくれというのには怒りなくなった。子ども一人の時は、夜帰って来てご飯を作ったりもしたが、だんだんしんどくなった。主婦ならそれ位してもいい筈だ。子どものおむつ替えでも、「便を朝から2回替えたから後はやって。」というようなありさまで、家事に向いていない人だ。家事のことができていないから腹が立つ。子どもの前で言ったらいけないと思うのだが、食ってかかるような言い方をされたりしたので、家事のことでは、こっちが気が狂いそう。生まれた双子を手の足りないところへ連れて来たので、S男まで赤ちゃんを叩く真似をしてしまった。たしかにS男を育てるときは一生懸命やっていた。今度は知らん顔して寝ている。赤ちゃんの生活を守るのではなく、自分に合わせようとする。自分がしたいと思っている通りにならないと嫌だという。あれせよ、これせよで自分も重苦しくなる。それでも「早よう寝。」と、言ってくれる時もある。良いときは良いが、当たってくる時もあり、もめることが次第に多くなってきている。経済生活では、始めの頃、僕の実家の援助を得ていたが、自分たちでやれそうになってきたら、親のことをうるさいと言いつ出した。乳児院の費用も実家から出してもらった。現在30万円の収入があり、家賃7万5千円、残りの手取りは15、6万円。僕の小遣いは、お金があればなんぼでも使うので、けじめを付けようと、手取りの一割ということにして、現在1万5千円。小児科の先生は、赤ちゃんを乳児院に預けることに絶対反対と言っている。

F夫の語るのを聞くと、本当に優しい人だという思いがする。F夫もF夫の母親も、「自分たちは決して間違ったことはしていない。」と、確信している。したがって、F夫が現在起こっている状況に対して、自分のほうにも理由があるとはとても思いつかないだろう。いうなれば、最初の穴をとばしてしまったような釘のかけ方をしているので、途中で間違いに気付くことができない状態といえるだろう。そこで、M子の語る内容と、F夫の語る内容を、スタートの所から比較してみなければならない。

F夫は、自分の幼児体験を語っているところで、母親が連れ歩くことに対して、他の兄弟たちは、大きくなってきて嫌がって逃げ出した。自分も嫌だったが、付いて行くのに努力したとある。それは、F夫の優しさであろうが、また、努力したと思っているようだが、M子から見方からすると、母の手から逃げる決断がつかず、ずるずると親離れ、子離れのできていない母子関係になっている。大きくなってきて、自分でも嫌だと思ったことをM子に同調させようとしている。それは、経済的に楽になる筈だという理由が付くだけに、M子の気持ちこそ我が儘勝手ということになってしまう。やがて夫の自立を促すことに疲れてきたM子に子どもができた。夫の実家続きのあり方を変えようとしたM子は、ここで方針を変え、自分たちの家庭作りを放棄して、S男を育てることに目標を絞った。M子のこの変化について、F夫は「始めいろいろ言っていたが、そのうちそれでもいいというようになってきた。」と、M子が夫や姑に同調してきたと受けとめている。次第に「あれもらってきて。」とまで言うようになってきたのは、もうそのことはどうでもいいのだと思うM子の態度だったと思われる。S男が夫の実家に溶けこんでしまうことを極度に嫌がったM子の真意は、「夫のように、S男が自立できない、決断ができないような人間になってはいけない。」と、いうところにあった。M子の都合におかまいなく入って来る人たち、子どもが可愛いということで、時間のことも、体のことも考えず連れ出す、食べさせる、物を与える。「我が家には玄関の扉が無かったのです。」と、M子は嘆いていた。

M子の悲劇は、夫と姑のような母子関係にたくないという思いがあまりにも強く働き過ぎて、夫と姑のような母子関係以上の強烈な母子関係を、わが子S男において作ってしまい、それに気付かなかったところがあった。それでもM子の日記には、出産についての心構えを作ろうと、努力しつつあることが記されていた。しかし、或る日突然、入院を宣告されベッドに張り付けられた。S男は母の入院期間の3ヶ月間泣きに泣いたという。M子の心はどのようなものであったか、想像にかたかない。

ところで、M子の家事のあり方だが、低血圧で朝起きにくいことについては、F夫もよく協力している。M子はF夫の言うように、家事が上手だとは思えないが、S男の子育てでは一所懸命やっていたことは、F夫も認めている。M子が家事も育児も極度にできなくなったのは、二度目の出産に関係していることで、M子の心が病んでしまっていたことに起因している。このことに気付かず当然のこととして要求すれば、今度はF夫がノイローゼになってしまうだろう。ここでは、F夫の優しさ、努力を認め、夫として、親としては状況を見極め、判断する意志決定が大事なことを話しておいた。

これは、M子の心理療法が終わった後のことであるが、筆者が児童相談所を尋ねた折、この件の担当責任者であった先生にお会いした。最初に赤ちゃんたちを預かった折、長期外泊したままで約束通り赤ちゃんたちを乳児院に戻さなかった。そして、その後に乳幼児虐待が起こったのであった。先生は言下にいった。「あの父親は、妻も子どもも守れない。」と。そこで再

入院の際、子どもたちの親でなく、M子の父親に責任を托し、誓約書の提出を求めたという。

### 第3回面接（1月4日）

#### 夢8（12月29日）

夜の公園で、ジェットコースターに私とあと2人の誰かと乗っている。レールの途中で止まって下を見下ろしている。

前に住んでいた家の2階で「ここも汚いな。」と、言いながら、私は掃除機をかけている。そこに目の大きなライオンの剥製がある。私はそのライオンを可愛がっている。そのライオンは剥製なのに生きている。私に対して嬉しそうにペロペロなめてくれた。ライオンなのにこんなに恐くないのかと、不思議に思っている。

注 夜の公園は、無意識界をさしている。普通は途中で止まらないジェットコースターを止めて、M子は何を見たのだろう。それにしても、M子は心の内の掃除を始めた。M子の「可愛がること」に見当違いがあり混乱していることが解る。

#### 夢8（つづき）

物干し台の所で、その高低を真剣に調べて調節していた私は、誰かに、「先生が話しがあるから来てくれ。」と、呼ばれていることを伝えられた。私を呼んでいるのがあの先生でなければいいのにと、脅えながら歩いて行くが、やっぱりその先生だった。私はその先生の前に座らされていろいろ話しを聞かれる。先生とは双子出産の際の主治医と、出産に立ち会った小児科の先生だった。文頭に字が書かれてあるその後続く作文を書けと言われて、「人間関係……」に続けて書く。いろいろと書いたが字が違っているなど言われ、イライラして泣きそうになっている。その時、この2人の先生が私の感情をそうしむけていると気付く。さらに、子どもを叩いたことや、私の今の精神状態をなじるような目で見たり指摘されたりして、私はだんだん感情が高ぶってくる。私のしていることは最低だとか、嘘ばかりだ自分の本心を出せなどと言われ、とうとう私は泣きわめいて気が狂ったようになってしまう。門がまえの字を何度も書き直している自分が印象的な夢。

注 M子が医師の前で行ったのは、「文章完成テスト」通称SCTという性格検査の一つで、これも投射法に属する心理テストである。M子はそのような心理テストがあるなど全く知らないのだから、夢の作業は不思議である。医師は、M子の知らないもつと奥の本心を出せと要求している。夢主M子の心の中に、医師とクライアントがいる。門がまえの字に拘るのは、人間関係を気にしていることと、門という字の示すこれから潜らねばならない関門が気になっている状況と察せられる。

#### 夢10（12月31日）

①マンションがたくさん建ち並んでいる所に、白と黒と茶色の巨大な熊が3頭いる。私はその熊と相撲をとっているような、戦っているような状況。



②空中にトランポリンがあり、私はその上を何かに脅え慌てながら走っている。地面からかなり高いところにあったトランポリンから私は飛び降りる。どきどきして、びっくりして目がさめたが、幸い降りても怪我はしないような場所だった。

注 元型的イメージの熊について、熊は子どもを育てるのに2年間という長い期間を費やす。ギリシャ語でもラテン語でも「熊」という単語は女性名詞で、古代の宗教が熊の積極的な母性的な特性を強調するところからも、熊は母親の愛情を表現するものと考えられる<sup>3)</sup>。白と黒と茶色<sup>2)</sup>の巨大な3頭の熊は、色で表わしたM子の3通りの母親としての自己表現で、それと格闘することは、自分の内面における「母なるもの」との対決が始まったことを意味している。この対決が終われば、やがて、不安定な状況から、現実のたしかな足場へ降りることができよう。着地は、ここでも相当危険をとまなう体験として示されているが、まず無事であろうという予測はたてられる。

環境の配慮ができたのでM子は気分的に落ちついてきて、近況を次のように話した。

年明けの3日実家に行って子どもたちを見た。A子も退院していて、風邪をひいてぐずぐずしていたが、覗きこんだら、甘えたような感じでベソをかいた。「しんどいんやな、可哀想やな。」と思った。これまで、わが子でありながら、余所の子以上に何とも思わなかったが、このときは、わが子というのではないが、「可哀想やな。」と、言った。それを母が見ていて、「やっぱり母親やな。」と、言った。

その夜遅く、M子から電話が入った。今日の午後、母に疲れが出て思い余った父が、乳児院に相談に行った。児童相談所の許可を得て、子どもたちは再入院となった。今の自分は子どもを看てやれる状態ではないので仕方がない。乳児院では、2歳になるまで、自信をもって引きうけるとのことだった。父とF夫に、「愛情が片寄り過ぎて、S男は我が儘になり過ぎているから保育所に入れるほうがいい。M子は、気分転換にアルバイトでもしながら心の調整をするように。」と言われた。このことで私はどうしたらいいのかという相談だった。M子はS男を手放すことをためらっているようだった。

#### 第4回面接 (1月11日)

##### 夢13 (1月7日)

何やら8体の霊が、F夫と私の体に侵入しているらしい。

注 8体は、地上の秩序である四角と天の秩序である円との合体で、再生を意味する<sup>4)</sup>。ここでの8体は、二者に分裂しているのかも知れない。

##### 夢15 (1月9日)

①F夫の兄らしい男の人と2人で、空に浮かんだ不安定な大きなクッションの上に座っている。兄がF夫のことについて何やら話しをしている。「あいつは殆んど家に居ない奴だった。」

それを聞いて私は思っている。「今はこんなにまじめに毎日帰って来るのになあ。」と。

②私の父が警察へ電話している。「娘は帰っているが、旦那はどこかへ失踪してしまっ…。」と。

注 M子の夫は家に居る。けれど本当に必要とする夫は居ない。M子の心の中の夫不在を語っている夢。

#### 夢16 (1月10日)

私と母とF夫の3人が学校で授業を受けている。それぞれ別のクラスで終わる時間が違っている。授業の後3人が落ちあうにいろいろゆき違いがあった。最後に母を待っていた喫茶店にいたら、私の親友が真っ赤<sup>2)</sup>な服を着て現れる。そのとき入って来たドアの向こうに細長い洞穴があり、何匹かの猫がいた。

#### 第5回面接 (1月22日)

#### 夢17 (1月11日)

①私は前に住んでいた家の2階のベランダから下を見ている。飛行場の滑走路が見えた。左手側に飛行機が離着陸するレールがあり、そこに飛行機を誘導するパイロットの服を着た男性が立っている。飛行機は左の上空から降りてくるが、レールを通り過ぎていくものも多く、ブロック塀にぶち当たったり、山の麓にぶち当たったりして爆発炎上する。それを見ているうちに、私は恐くなり、この上に落ちないように祈った。とても恐い夢だった。

②入院していた病院の寝間着を着ている私が、うす暗い建物の中にある古い手洗いの鏡の前に立って、隣の女の人と話している。私は妊娠していた頃の心境に戻っている。右の手のひらの甲が異常に盛り上がっている。その中にA子(被虐待児)が入っている。私は「まだ出てこないみたい。」と、話しながら手を洗い、手のひらに水を浴びせると、中の赤ちゃんがくっきり肉眼で見えている。

③私の父と母がA子を抱き、少し慌てた様子で歩いている。私とF夫がその後について問かけのように歩いている。場面変わり、A子が私とF夫の目の前にいるが、顔は所々赤く傷跡がついている。どうやら爪跡みたいだ。私が母を見ると、母の顔色が変わりとてもイライラしているような、普通の精神状態ではない顔付きをしていた。父と母は、その後も何やら慌てた様子でうろろしながら歩いていた。私は母も相当イライラしたんだなと思っている。

注 ①でも着地の難しさが語られて、無事でありますようにと祈るM子。②M子にとってA子はまだ産まれていない。A子を叩いた右手をしきりに洗って心の浄化を計っているよう。③自分の姿を両親に投射して見ている。M子はまだA子に対して、直接痛みを感じてはいない。しかし、無意識内では、その自覚があるといえるだろう。

#### 夢18 (1月12日)

① 緑色<sup>2)</sup>の背の高い草がいっぱい茂っている土手で、私の飼っている犬P太が繋がれてい

る。私はP太に餌を与えるため、器に入れたご飯を持って行ってその場に置いて帰るが、後で行ってみるとそれを誰かが邪魔するらしく、その餌は盗られていたり、食べられなくなっていたりする。私の心は煮えくりかえっている。夢の中では犯人は解っているらしく、見つけたらただでは済まないからな！と思いながら、帰ってはまたその場に来てP太を助けている。

注 M子には出産後、双子を育てることができなかった代わりに、犬を飼いだした。無意識的な「育てる」ことの代償であろう。夢の中でも、この飼犬を一所懸命育てようとしているが、何故か邪魔される。そして、その犯人に対してすごい怒りを感じている。M子は夢の中でその犯人を知っているらしいと語っているが、その犯人は、乳児院に恐い先生がいるが、その人が犯人らしいと言った。この先生が邪魔するから私は、わが子を育てることができないでいると、すり替えて見せた、M子の屈折した深層心理での母性性であろう。

夢20 (1月14日)

①双子が揃って帰って来たが、S男がもう少し小さい頃に戻って2人になっていた。

②F夫の実家からかなり遠い所に買う予定だった家に、F夫の両親と私たち夫婦が同居しているような様子。日曜日だがF夫は仕事があって不在。姑は仕事が休みで家に居る。残された私は、食事を姑と2人で食べなければならないなんてどうしよう。どこかに行かなければ……と思っている。結局すぐ出かけ、病院に来ている。広い診察室の長い机の所に小児科の先生がいて、私は診察を受けている。頭を両側から何かの器具ではさまれて、上へ持ち上げられている。それを何度もくり返している。血圧を計っているという。

注 ①双子が帰って来たといっても、それは双子のS男になってしまう。M子はまだ双子を受け入れることはできない。②は姑との同居はM子にとって苦痛であり、それを避けようとする病院行きになるM子の現状。

夢21 (1月15日)

実家の家族と私がカーフェリーに乗っていて、畳の上でくつろいでいる。母がF夫の母に電話をしている。母が姑と勝手に和解し合っているらしく、あげくに、私にも電話に出るように言う。私はいいや電話に出る。姑はとても感激した様子で優しく、「明日来られるねんて?」と、言った。私は「まだそんな気持ちにはなれません!すみません。」と、言ったが、少し腹が立った。それでも姑は、おかまいなしにいろいろ話をしてきたので、「正直言って今度の旅で会う気はないし、S男も高校を出るくらいまでは会わせる気持ちになれません!」とはっきり言ってやった。電話を切って母に話の内容を説明するが、「なんでそんなこと勝手に決めるの!私そんな気ないで!」と、母にどなっている。なんと思われてももう平気だと思った。F夫とのことも、もうどうなってもいいわと思った。

実家の猫が一匹、私に近寄って来た。私は「そうだった、そろそろおしめを替えてやらないと。」と、思い、母に「おしめ持ってきた?」と、聞く。そこで猫を抱き、哺乳瓶でミルクを飲ませている。その後、私はトイレに行った。後ろ向きになっている私の背中めがけて、蛇が

飛びついてきて、背中に噛みついたのでびくっとして目がさめた。

注 M子は姑に直接不満をおつけたことは無かった。夢の中でやっと直接自分の思いを伝えた。なお、ここでも育児についての混乱が起こっており、猫を赤ちゃんのように扱っているM子。蛇が背中から噛みつくとは、何か自分の見えない所から変化が起こり始める予感のよう。蛇は無意識のエネルギーを表わし、また、ギリシアの医療の神アスクレピオスの化身であって、すべての病を癒すダイナミックな力をもっているなど、思い浮かぶ。「S男が高校を出るくらいまでは姑に会わせたくない。」と、M子は面接のとき語っている。

#### 夢22 (1月17日)

夜になり、ベランダから空を見ていると、UFOが飛んでいた。

注 UFO (未確認飛行物体) は、空を飛ぶ一種の容器と考えられる。ユングも晩年にUFOについて書いているが、ユングに近い立場のエリッヒ・ノイマンは、『大母神』という本の中で女の象徴表現はすべて容器だ、と言っている。わが国でも、母親のことを「おふくろ」と呼ぶのだから、容れ物という共通感覚で母親をイメージしていることは、洋の東西を問わない普遍的なイメージと思われる。UFOは空を飛ぶ容器だが、同時に、地球と宇宙との媒介の働きをする機能があると言ってよいだろう。夢に現れたUFOは、意識と無意識の間を媒介するものとして、無意識から母性にかかわる何かのメッセージを、伝えようとして表われるのであろう。

#### 夢26 (1月21日)

F夫と私が船に乗っている。2人とも何かの講義を受けるため、どこかの部屋に向かって階段を下りていく。F夫の受ける部屋が先に見つかったが、私は別の部屋らしい。少し不安な気持ちで、そこよりまだ2、3階くらい下の船底に近い部屋に行く。そこは、「養護施設」と看板がある。私はここで授業を受けるの?と言って、F夫にこんな所嫌やわと少しだだをこねている。

注 M子は海に浮かぶ船の、それも深い所にある部屋、つまり深層心理で癒しの勉強をすることになる。

夢分析の終わった後のM子の話。先生は、私の苦しい状況が何故こうなったかと教えてくださったことで、心が本当に救われた。それまでは、自分が変なのかも知れないということで苦しんだ。また、自立について思うことがある。結婚した当初姑は言った。「家の子どもたちは自立させてある。」と。しかし、家が狭いので近くに部屋を借りていて、食事その他、小遣いが足りなくなればもらいに行くということで、形だけ離れているが、心は自立できていない。私の父は、自分の生育歴から、かなり自立精神をもつようになっていた。兄が勤め先が遠いことで家を出たいと父に言ったとき、独立してやっていくのなら、遊びに帰ってくるのはいいが、甘えないことを厳しく言っていた。それを聞いていて、「きつい父だな。」と、思ったが、今

になってみると、F夫の在り方を思うにつけ、自立がいかに大事なことだったかと思う。

**第6回面接**（2月3日）

**夢27**（1月22日）

私は押し入れの中にいる。屋根裏から入ったり出たりしている。カンガルーなどいろいろの動物に出会った。押し入れから出ようとすると、目の前に大きな虎がいた。恐くて急いで襖を閉め、少し開いて隙間から虎がどこかへ行ったら出ようとチャンスを伺っている。

**夢34**（1月24日）

ジェットコースターに友人や中年のおばさん、その他何人か乗っていて、これから動きだそうとしている。私も乗るが、一人だけ反対を向いて乗っている。そのジェットコースターは、シーソーのような形をしていて、しっかり持っていないと振り落とされそうだった。私は、「こんな乗り方していると危ないね。」と、言い、前を向いて乗りなおし、ジェットコースターは出発する。

**夢36**（1月25日）

単車に乗って広い道路で信号待ちをしている。道がよくわからないので、どっちへ行こうかと迷っている。

**夢40**（1月28日）

前に住んでいた家の2階。私が使っていた部屋で、F夫と私は大の字になって話している。とうとうまたこの家を、自分の家として住める日がきたのだ。夢を見ているようで嬉しくて茫然としている。「夢では何度も見たけど、この家が自分の手に入るなんて信じられないことだった。」と。私はただただ嬉しくて感激していた。

注 実存的な意味でM子は自分自身を見失っていた。自分が住みたいと思っていた場所、それはもう二度と手に入らないものと思っていたが、それを手に入れた。つまり、自分を取り戻したという思いがして嬉しかったのであろう。それは夢の中での感慨であろうが、M子の心には、回復のきざしが見えたのだらう。

**夢42**（1月28日）

①どこかの公園で私はブランコに乗り、そのブランコを思いきり漕いでいる。下に中学校の同級生の男の子が何人もいて、思い出話をしては私に声をかける。その後、中学校時代の美術の先生が、私の生まれた家に来ていた。

②私はそろそろ帰ろうとして、部屋に置き忘れた物をとりに戻った。二つまでは見つかるが、あと一つ茶色の靴がないので、先生に聞こうと思っている。ベランダ側の庭に小さい机があり、そこで何人かの女の人が帰るための順番待ちをしていた。私は机の前に座っている女の人に、茶色の靴が見つからないなど言った後、机の横に寝ている赤ちゃんを連れて帰らないといけないことになっているらしいが、私は、少し病気でどうのこうのと説明している。その女の人は

解ってくれて、「それじゃ子どもは置いていっていいですよ。」と、言ってくれた。私はホッとして急いでさっきのブランコのある公園に戻る。そしてまた同級生たちといろいろ話しをしていた。

注 茶色は、大地、豊かさを表す色で、母性を表現する色でもある。そのような意味をもつ茶色の靴を失っているのだから、まだ母親として子どもを引き取る力がないことを、この夢は語っているが、気分はかなりゆったりしてきたようだ。

夢44 (1月30日)

私は天上を見ていた。夜だった。空に一つ光が動いている。「UFOだ!」と、私は大声で言った。皆が一勢にその光を見て「本当だ、UFOだ! 恐いなあ。」と言っている。始めは「流れ星だよ」という声もあったが、あっちこっちにもものすごいスピードで移動するので、確実にUFOだということが解った。UFOは空に象の絵を描いた。真っ黒な空に光の象の絵はとても綺麗だった。そんな感激も束の間、UFOは地上へ向かって2本の光線を発射してきた。その2本の光線の枠の中に、私のいる場所が入っていて、連れていかれてしまうという。みんな恐くなり次々に逃げる。私もS男の靴だけ持って逃げるが、会館のドアはどこも開かず、仕方なくその場へ戻ってきた。もう何人かの人が空の上の方まで行っていた。私は「なぜ、選りにも選って私のいる場所にUFOが来たのかな?」と、不幸に思っ見ていた。

注 象は野性の動物であるが、力強く、インド象のように人間の仕事を助ける動物であることからの連想で、人間を守る保護的な母親の力を意味する場合もある。闇の天空に光線で美しく象を描いたUFO。未知の物体は何をメッセージしようとしたのか。M子はこのUFOに、選りにも選ってと、「選ばれてあることの不幸」、つまり、時代のスケープ・ゴートを思うのだった。M子の多くの夢の中で、筆者が感動した夢の一つである。

夢45 (1月31日)

船に乗って祖母(父方の祖母で故人)が来た。もしかしたら祖母の姿をした私自身かも知れない。私は祖母に「どうしたの? 何なの?」と何度も聞くが、祖母はしばらく黙ったまま船で私の目の前をゆっくり回っていた。突然祖母は「あっ…」と言って戻っていった。その後、私はそのことを誰かに必死で話していた。

注 M子は祖母の気性に似ているという。祖母の姿をした私自身かも知れないと感ずる由縁である。祖母は、いやM子は何かを感じとっているようだが、具体的にそれが何であるかは解らないでいる。

自分の心を取り戻し始めたM子は、幼い頃のことなどいろいろ語った。祖母は母のことを良くは言わなかった。孫の私も母のことをよく聞かされた。母は耐えられず家出したこともある。母がいいか祖母がいいかと聞かれても、「どっちにもつかない。」と、私は言った。どっちにもつきたくなかったのは、どっちとも離れてほしくないからだと思った。子どものことでは、

今わりに落ちついているが、見に行ったら、また動揺するかも知れない心配があるので、乳児院にはあまり行きたくない。母がよく行ってくれるので、報告は受けている。S男が可愛すぎて、下の子ができて、同じように可愛いと思える自信が無くて不安だった。F夫とS男との3人の今の生活がベストだから、煩わしいので預けておくほうがいい。

(2月4日)

夕方、M子から電話が入る。街に出たとき、友人と連れ立っていた姑に出会った。話しかけられたことからイライラして、帰宅。F夫と喧嘩になった。F夫は、「それならやりようがない。」と、家を出て行った。筆者は、F夫の実家に電話で釈明しておくことを約す。それにしても、M子の心の不安定さを本当に解ってもらうことは難しい。F夫は実家に来ていなかったが、母親との電話は2時間半という長話になった。

M子の両親の面接 (2月5日)

昨日のトラブルに関して、M子の両親から緊急面接の依頼あり。「F夫の姉から、店に電話が入った。忙しい最中だったので母親が聞き漏らした点もあるようだが、お姉さんが感情的で、“M子の処置は入院するかどうかのことやで、治らないなら我が家の嫁として……離婚も…。今カウンセリングを受けていることも、そちらで頼んだ人やから、そちらばかり最優先している。”」父親は、以上のことについてどう対処したらいいか、ということと、自分としても、M子については解らないこともあるので、教えてほしいということで来談。父親としての考えでは、「先生に出会って以来のM子は、顔つきの緊張も柔らぎ、だんだん良くなってきているのが解る。離婚という前に、何かしてやれることはないか。あちらの家から、我が家に対していろいろ言われた。F夫の姉が言ってきたことは最もなことと思う。正直言って、自分たちもM子の気持ちは理解できなかった。時としてめちゃくちゃな我が儘を言っているようで我慢ならなくなり、ぶんなぐってやって……という気さえて、自分の気持ちを押さえるのに苦勞した。ありきたりの概念(超我が儘とか性格異常)で対応しようとして、M子を苦しめた罪は自分たちにもある。今はM子のことについて、みじめな引け目は感じていないが、F夫の姉の怒る気持ちも解る。母親からの連絡ではないので、離婚についての警告なのか、決定的通知なのかは不明である。」

父親の話の後、M子の状況や、どのような方法のカウンセリングをしているかを改めて説明しておく。普通カウンセリングのことに無縁の状態にいた人にとっては、解りにくいことだろうから、F夫の姉の反応も仕方のないことだろう。F夫の母に話したように、直接話をすれば解ってもらえるにしても、その人が、それを人に話せる程に解るものではないので、M子に直接関係を持っている以外の人に対しては、折あればの伝達になっている。離婚云々については、M子が治った状態になってから、それも、彼等夫婦の人生は、彼等の選択で意思決定するのが

本当だろうから、囲りで決めるわけにはいかないと思うなどの話をして、面接は3時間半となる。

(2月7日)

I市の福祉課の係とは、S男の保育所入所にあたって、M子の診断書を依頼されたことがあり、何かあれば連絡をとりあう約束をしていた。そこで、今回のトラブルについて、F夫の母親から相談があったことを報告された。福祉課の係の方では、F夫の母親へ適切に応答されていた。この後、筆者は、再度F夫の母親に電話をいれ、M子の両親が相談に来られたこと、そして、M子の両親の意向を伝えた。F夫の母は、「先生に言われたように、M子に近づかないようにしていたが、あのときは、友人と一緒にだったので知らない顔もできず声をかけ話してしまった。M子の実家に言ったことは、私の意見でなく、姉は気が強いのであんなことをしてしまった。」と、いうことだった。F夫の実家では、父親は影の人で全く出てこない。F夫の姉が一家の代表といえる立場のような動きをしており、「家の嫁」という発言をしている。F夫の姉は未だ承知することではないだろうが、今回のトラブルの処置は、ひとまずこれで終了とした。

第7回面接 (2月10日)

夢50 (2月3日)

デパートの地下の食料品売り場にF夫と2人でいた。そこは、店ではないが、椅子だけをカウンターのように円形に並べてあり、スポン料理を食べさせるスペースがある。私がそこを通りかかると、亀がまな板の上で料理される場所だった。亀は私に死にたくないと言っているのが解った。私がそばに行くと「助けて！」というように、床へ体全体からいっぱい水を零したが、それは涙だった。私は必死で何度も助けてあげると頼むが、調理人は笑って、何とも思っていない様子だった。私はその亀を連れて、店の中を一周していると閉店の音楽がなったので、「ああ助かった」と思い調理場に戻ったが、すでに亀は料理された後だった。結局私は亀をどうしてやることもできなかった。悲しくてやり切れない気持ちだった。調理していたのは私の叔母(父に性格が似ている)だった。「もう閉店時間だから大丈夫だと思ったのに……。」と、詰っている。その後、亀はグレーの狐に変わっていて、F夫が殺された狐の毛皮を着ている。その毛皮は本来の狐の毛皮のように毛がフサフサしていなくて、衿もとは茶色と黒と白の線の入ったネクタイで作られてあった。そして、裾は広がってビヨンと上にあがっていて、パーティ用のような服だった。F夫はお尻にリボンをつけていて、何だか仮装行列のような可笑しな格好をして立っている。私は、せめてこの毛皮を大事にしないと、死んだ狐が報われないと思ってF夫と話している。

注 亀は長寿の象徴でめでたい動物である。昔話の浦島太郎を背に乗せて、深海の竜宮城に



連れて行ったのは亀である。陸と海の間を往復するもの、すなわち、意識と無意識を繋ぐ役割を担う亀だからこそ、M子は必死でこれを守ろうとした。もっと極言すれば、亀こそM子自身の表現の一つであろう。亀は体全体から涙を流していたのである。それこそ、深層心理の次元で苦悩するM子が流す涙であったといえるだろう。M子の作った初めの箱庭と、最後の箱庭は全く趣の違ったものであったが、そのどちらにも登場したのが、異なった領域を繋ぐ、橋と亀と鳥であった。命を繋ぐ亀は、心理治療のプロセスにおいてここでいったん殺されてしまった。亀を通してみると、生・死・再生というプロセスを辿っていたことが解る。M子はこの夢の最後で、死んだ狐、実は亀を忘れてはならないことを語っている。なお、M子の夢に、「茶色と黒と白」の、色の組み合わせが何度か出てきている。茶色については、すでに「見失った茶色の靴」（夢42）で説明したが、白は「浄化された、不安や汚れを知らぬ明るさ」を、黒は「孤独な怒りを抑圧したものとか、罪とか、それが何か分からない未知なるもの」などを表現している。この夢は、M子の心の深層を語った「夢らしい夢」の一つであった。

夢51 （2月3日）

①寝ていると電話が鳴った。もう朝になっていた。電話は姑からだった。「あのね、あの方居られるんですかねえ。」と、ひどくよそよそしく喧嘩を売るような言い方だった。私は「もう仕事に出かけたようですけど。」と、言うが、隣の部屋でごそごそと音がして襖が開いた。F夫はまだ家にいた。時計を見るとまだ朝の5時半だった。姑は「そう、ではあなたでもいいわ。」と、話してきた。私は途中でF夫に電話を渡した。姑は喧嘩を売ってきたのだ。ひどいことをさんざん言って、私を逆上させた。電話を切って仕事に行こうとするF夫に、「私はもう一度電話をかけて、こっちも思いきり言ってやるわ!」と、言う。F夫は困った顔をして「もうええやんか。」と、言っている。

②F夫の祖母のお葬式に行っている。一番お祖母ちゃん子だった姉が、どんな様子か気になったので探すと、棺桶の左側で頭を垂れてしゃがみ込んで泣いていた。私は、「ああ、これでお姉さんもお嫁にゆくわ……。」と、ホッとするが、同時に「お祖母ちゃんは良くしてくれたしな。」と思うと涙が溢れた。

注 この夢は、前回面接日の朝、トラブルが起こった前日の夢である。この夢は、M子が、姑に話しかけられて逆上することを予知していたのか、このような夢を見ていたので逆上してしまったのか。夢のなかで起こることが、ただちに現実に起こるというのではないが、夢の中のできごととの間には、ある種の照応関係はあるようだ。前回面接の最後の夢45も、今回のトラブルに関したものであったことは疑えなかった。

夢53 （2月5日）

①飼い犬のP太の首輪を放すと実家の前の大きな道路を走っていった。放した瞬間「危ない!」と思い、後悔するや否や「キャーン」と犬の声がした。私は実家の中で、何人かの男の人と円形になって話をしていた。私はその中の人に、「今、キャーンって声したよね。」

と、聞く。男の人は「うん聞こえた。」と、いう。しばらくして、誰かが、車にひかれたP太と、車を運転していた若い男を連れて店に入って来た。P太は死んではいなかったが重傷だった。私はP太をひいた男を叩きながら、「P太をどうしてくれるの？なんでひくのよ！」と涙を流しながら訴えていた。男も軽く私を叩き返している。その男は赤っばい服を着た素敵な男性だった。その男を叩いているときは、真剣に腹が立っていたが、その反面でその男性に惹かれている自分に気付いていた。P太は病院に運ばれ手術を受けているらしく、父母と妹が一緒に行っている。その後、私は叩いた憎いはずの男と一緒に寝床の中にいた。本当は、憎まなければいけないのに、私はその男に甘えている。男は本心と裏腹に戸惑っている様子。そこへ母が来たので、私と男は眠っているふりをしたが、私はP太の具合が気になっていたの、母に聞くと、母は「P太は大丈夫。」と、言いながら、私たちを不機嫌な顔をして見た。私はP太の具合にホッとしていたが、母は「あんたたち早く離れなさい！」と怒って向こうへ行った。

②私と男は、どこかのテーブルに向かい合わせに座って話をしている。

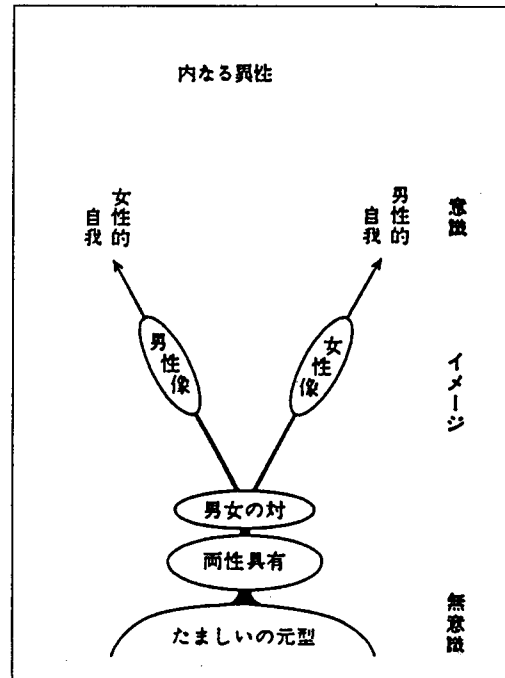
③生家にいる私の所に、母が「郵便が届いているよ。」と、持ってきた。母は、本当は見せたくないというような顔をしていた。手紙は男からのものだった。茶色の封筒で、中には白い石膏のような長方形の大きな物が入っていた。そして、茶色の封筒の表面に「2月〇日出産予定」と書いてあった。どうやら男が妊娠したという知らせらしい。私は「自分は今、子どもをととても可愛がって一緒に暮らしている。いくら私の子どもだと言っても、余所で知らない間に大きくなったら、その子が自分をどんな父だと思うだろう……。」などと、訳の解らないことを思い惑っていた。母に「あんたどうするのよ！」と、責められ、やっぱり子どもはおろすように話してみようかな、それなら一刻も早く言わないと……。」と、考えていた。

注 M子の一連の夢を記すに当たって、最初に断っておいたように、この報告では、M子の心の内界と外界との照応をみるに役立つようなコメントを付けてきたが、深層心理を分析するというに価するコメントは稀であった。この夢は、重要な内容を持っているので、稀なものとして、分析をしておこう。この症例報告では、M子の内界における母性性に焦点を当てたため、男と女の問題には触れずにきている。しかし、男と女の問題は、人間存在の根源にかかわるものとして、母性性の問題とともに、根源的な問題と位置付けられるだろう。これまでの夢に、男に誘われる場面が何度かあったのだが、「自分には夫も子どももいるのですよ。」と、誘いにのらないM子があった。その延長上にあるこの男女関係は、一見、母親が不機嫌になるというような「不倫」を思わせるが、実は単純な内容のものではない。

ユングは夢のなかの異性像に注目し、男性の内界には女性が存在し、女性の内界には男性が存在すると考えた。そして男性の場合は、そのような内的な女性像の元型をアニマ、女性の場合は、そのような男性の元型をアニムスと呼んだ。そして、アニマまたはアニムスを論ずるとき、アニマイメージが男性にとっての「たましい (Seele, soul) のイメージ」であるように、アニムスイメージは女性にとっての「たましいのイメージ」であるという。女性に対して、

「方向を与える」あるいは「支えとなる」アニムスが、この夢①・②の男であるといえるだろう。①の男は「誰か」という正体の解らない何者かによって、M子の前に連れてこられた。この男はM子の大切にしている飼い犬のP太を、危うく殺してしまうようなことをした男で、M子としては許せるはずのない男である。M子におけるP太は、双子の身替わりとして「育てる」対象になっていた飼い犬である。M子が、わが子たちを迎え入れるためには、まずこの「飼育」を放棄しなくてはならないのである。M子には到底理解できないことであったが、この男は、M子からP太を引き離そうとする、大事な仕事をしようとしたのである。M子がこの男に初めは怒りをみせているが、そのかかわりのなかで、男に惹かれていくのは、この男がどのような役割を果たしたかを感じとってきたからであろう。この男こそ、M子の「たましいのイメージ」としてのアニムスである。②でM子が男と語りあっているのは、多分①の内容についてであろう。③ではM子が父親になり、男が妊娠するという、奇妙な変換が起こっている。つまり、男女の性が変換している。先にアニマの元型、アニムスの元型にふれたが、もっと深い所にあるたましいの元型は、男性とか女性に分化されたものでなく、あるのは「たましいの元型」という一つの元型であると思われる。したがって、最も深いたましいの元型は、両性具有的なイメージとなるのではないだろうか。とすれば、M子のこの夢は、いかに魂の深みの表現であるかが伺われるのである。このあたりの考察については、河合隼雄の「とりかえばや、男と女<sup>3)</sup>」を参考にして頂ければ、人間存在の深層の謎に近づけるのではないだろうか。(図 たましいの元型とイメージ)

図 たましいの元型とイメージ



この夢をM子の状況に即してみると、M子は超難産で出産前後意識を失っていたため、わが子に対して陣痛という身体記憶を持っていない。いくなれば、M子は、父親的な意識状態でわが子の存在を知ったことになる。夢で父親側になっているのは、このことをいっているといえるだろう。まして、育てていない立場からすると、その親子関係は「その子は大きくなってどんな親だと思っだろう。」と、不安に思うのも頷ける。M子は夢の中で、「わけの解らないことを思い迷っている。」と、言っているが、分析すれば、意識的にも無意識的にも納得できるものであった。なお、M子の重要な夢50、53には円形の場面が出てくる。サンスクリット語で

「円輪」という意味を持つマンダラは、心理治療の注目すべき転回点に出現することが知られている。

夢56 (2月9日)

母方の祖母が私たちの家に遊びに来ている。その家は私の生家だった。祖母は双子を外出させていて、今まで一緒にいたらしい。乳児院へ双子を返してすぐこちらへ来たという。だがそのとき私は、B子に「高い高い！」をしてやって遊んでいた。2歳になったB子だった。祖母はさっき乳児院へ子どもを返しに行ったとき、入れ違いに70人の人が入って来て、双子はその人たちに連れて行かれたみたいだと、曖昧なことを言った。70人中2人は女の人だったという。でも現に今、B子はここにいるんだからA子が連れて行かれたということだ。私は傍に居た保母さんに、「身元も知らない人に子どもを渡したんですか？」と聞く。保母さんは、「親戚の者だとおっしゃったので……。」と曖昧なことを言った。私は「そんな頼りないことでどうするんですか！」と、保母さんをせめた。保母さんは「すみません。」と、困ったように下をむいた。

注 M子の心の深層で、母性が正常な姿で働き始めたようである。ただし、B子は抵抗なく受け入れられているが、暴力をふるってしまったA子に対しては、抵抗があるようで、誰かに連れ去られて行方不明になっている。行方不明だが、保母さんに「そんな頼りないことでどうするんですか！」と、責めている。それは、自分自身に対する叱責であろう。夢の中のB子が2歳になっているのは、乳児院から子どもを引き取れる時期についての約束が、2歳となっているからであろう。

夢57 (2月9日)

すごく高いビルの部屋に私がいて、窓から下を見ている。その大きなガラス窓には、鷺の絵が描かれてあった。下は遊園地だった。そこでは誰かが追いかけていて、あっちこちに隠れたりしていた。私もそれに関連しているらしく、何やらびくびくして下の様子を伺っている。

第8回面接 (2月18日)

夢60 (2月11日)

難しい本を読みながら○をつけたりして夢分析をしている。父と母が帰って来たのと入れ違いに家を出た。その本を持って歩きながら、夢分析をして信号の所まで来たが、もう夜の11時半だったので、こんな所でウロウロしていて、変な人が来たら怖いので家に戻った。

夢61 (2月12日)

台風が来ていて、同時に地震があった。庭で消火器を使っている人がいた。火災になる危険があるので、消火器のある場所を確認したり、使い方を教えてもらったりしている。

夢65 (2月13日)

B子をあやしている。「高い高い！」をしてやると、笑って「キャッキャッ」と喜んでいて。とても可愛いく、愛しく思っている。S男に対する思いと同じだった。

夢70 (2月15日)

ベッドがある寝室にいた。その家の外には川のような所があり、地面も悪かった。私は寝室を出て川の中にいる。川の中には男女がカップルで何人かいた。時代劇のような雰囲気だった。どこかの小父さんがいて、男の人たちに相手の女を殺すように命令していた。私も殺されるらしい。周りの女たちはすでに死んで川にプカプカ浮いていた。私は殺されたのになぜか生きていたので、必死に死んだふりをして川に浮いていた。

夢73 (2月18日)

①父と母が、私の書きとめた夢を見て驚いている。「この子は、すごく予知能力があるということが夢に出ている。」と、言っている。

②友人のT子が私の家に来ている。子供を抱っこしている。その子はT子の夫にそっくりだなと思って見ている。T子が「子供がこんなに可愛いの。」と、切ない気持ちを一所懸命に話す。私は「いいわね。私なんかそんな気持ちになれなくて……。」と言うと、「ウソツ、そんな気持ちになるなんて!」と、びっくりしている。

③どこかの団地の3階のベランダに、父と母と私がいる。父方のお祖母ちゃんの遺書を見つけた。「自分はここから飛び降りて自殺したんだ」と書いてあった。そして、「いついつ、こういう場所で幽霊になって現われるから」ということまで書いてあった。そのお祖母ちゃんが幽霊になって現われた。私はお祖母ちゃんに「なんでこんな病気になったの? 治して!」と泣きすがる。

夢74 (2月18日)

場所はビルの地下のような所。女の人と2人で、入院しているときの状態のような話をしながら歩いてくる。エレベーターの前まで来たら、その女の人が「お祓いしてもらわなければならない。」と、言う。私は「そういうことではないのよ。」と、弁解している。そこに別の女の人が出て、お酒の入っているコップを差し出し、「これには男の人のたましいが入っているから飲みなさい。」と、すすめるが、「そんな気持ちの悪いものは飲みたくない。」と、言って逃がっている。

M子の所に東京から、父母に暴力をふるっているという一人娘の友だちが、話を聞いてもらいに来たという。自分が苦しんでいるせいか、友だちのこのような話を聞いてあげる機会が多くなったという。

第9回面接 (2月27日)

夢78 (2月19日)

やっと教室にたどり着いた。S男も一緒にいた。後ろのドアを開けてそっと入る。授業が始まるところだった。小走りで一番前の左端の自分の席に着き、持っていたお菓子を机の上に置いた。一番後ろの席の男の子が立ちあがり、「いずればれることだと思うけど、あの人（私のこと）は金属バットで人を殺したんですよ！」と、先生に言いつけた。先生はびっくりしていた。でも私は、自分を守るために殺したのでそんなに罪悪感を感じていなかった。先生は私の持ってきた飴の入った袋を持ち上げて、「この人はいつまでたってもこういう物が好きなんですよ。」と、皆に言った。それは、子どもが持つような絵のついた袋だった。

注 M子はS男と離れられないでいる自分、飴の好きな幼児性をもっている自分を自ら語っている。また、殺人をしても罪悪感を感じられないでいたあの「金属バット両親撲殺事件」の予備校生の深い心の内にあるものと同じように、「自分を守るために暴力をふるった。」と、説明しているようだ。それは、この世の倫理に触れることなのだが、実存的に、自分が壊れそうな危機的状況の不安から、無意識的に自己を救う行為だったのだ、と弁明しているのであろう。「意識」では把握できないことであったが、「無意識」では、自分をよく知っているという夢である。

夢80 (2月21日)

見晴らしのいい場所で、F夫のお姉さんと会って話している。初めのうちお姉さんに一方的にしゃべられた。全ての言い分を聞いた後、私は煮えくりかえった心を思いっきり吐き出して一方的にしゃべった。最後には、私の全ての状況を理解したように何も言わず「うん、うん」と笑顔で落ち着いて聞いてくれた。姑もどこかで聞いているらしい。

注 聞いていてホッとする夢。それが夢であるとしても、M子の心を開かせるに役立つ夢である。

夢78 (2月19日)

大きな会館の前の広場に席がある。右端にF夫と私とS男が座っている。そこへ夫の実家の人たちが現われ、私たちの傍にやって来た。私はその人たちと、絶対目を合わせないでおこうとしていた。S男を隠すようにしていた。皆が立ち去ろうとしたとき、F夫のお兄さんだけには少し話をした。

注 M子の心が少し開いてきたかな、と思ったりもするが、S男のこととなるとまだまだ拘りが強い。

S男は保育所に行っているが、そこでは食事を全く受けつけない。保育さんが、一所懸命に食べさせようとしてくれるが効果がないという。どうしたらいいのかと相談される。この対処では、保育所の方へも頼んでおくことを約す。後に、保育所に電話をして、担当の先生に話を聞く。保育所は、不適応児のS男に対して、扱いに困っているという。筆者は、当面の食事に

ついて、心理的に抵抗している場面拒食であろうから、S男の食事は用意してやって、食べさせるということは一切しないで、そっとしておいて欲しいと頼んでおいた。

この件では、今回のM子の報告で、一口つまみをするようになって以来、だんだん食べてゆけそうとあり、やがて、一番先に食べるようになったと報告された。M子は、S男を保育所に行かせることも、大変抵抗があつて手放しかねていたが、日を追って、「1日に、2、3時間でもこんなゆっくりした時間があつたのか。」と、感慨を述べている。S男が保育所に行けなかったのは、自分に理由があつたのだと、少し気付いたようだった。

#### 第10回面接 (3月7日)

##### 夢94 (2月28日)

講堂の中で皆が円になって、曲に合わせてダンスをしている。私もその中で踊った。

##### 夢101 (3月3日)

大きな正方形のシーソーに、私と中学生時代の仲良しの女の子とが乗っている。ものすごい勢いで風に吹かれて、大きく揺れているので地面に足を着けたいが、とても降りることができない。もう外は暗くなってきている。2人は「怖い! 怖い!」と叫んでいた。そのうち2人が協力しあい、ようやくシーソーから降りることができた。

##### 夢102 (3月4日)

夜、何人かで空を見ていると、UFOがいて、私たちは宇宙人を見た。私たちとUFOは交流をもった。

注 自分でありながら、未だ知ることのなかった自分との交流が、できるようになったという意味であろう。

##### 夢103 (3月4日)

ハムスターがたくさんいる。私は黒と白のおちの雌のハムスターを抱いていると、足元から黒い大きな犬がハムスターに襲いかかろうとしている。階段の降り口にいると母が来て、私からハムスターを受け取り、持っていた紙粘土の中に入れて握りつぶした。私はびっくりして、「よくそんなことするね!」と、言うと、母は笑って「どうってことないのよ。もともとこれは、紙粘土でできているんだから作り直すわ。」と、言った。

S男を左側に抱き、もう一人赤ちゃんを右手に抱いて、階段を降りようとしている。2人も子どもがいると両手があるなと思って、階段を降りている。2人とも同じように可愛かった。

注 M子が抱いている黒と白のおちのハムスターは、M子自身の心であり、黒い大きな犬も、M子自身の内にひそむものであろう。M子が双子を受け入れるためには、M子の内にある元型「母なるもの」の力によって、まず自分自身を改造せねばならない。現状のM子は、双子を育てるに必要な、心の両手をS男のために片手しか使えない状態で、B子一人なら受け入れられるだろうが、A子の受け入れはできないでいる状態であることを語っている。しかし、自己変

容のきざしが伺われる。

**第11回面接 (3月14日)**

**夢110 (3月7日)**

私たち家族が皆で写真をとる長椅子に座っている。私とF夫の間にか、私とS男の間にかははっきりしないが、空いた席があり、そこへ、A子とB子を埋めたら良いと思っている。

注 M子の心の内に、双子を入れるスペースができたようである。

**夢111 (3月8日)**

①幼稚園児が大勢、列を作って登園していく。私は道路の端で自転車に乗ったまま立ち止まって、S男の保母さんと話している。幼稚園児は皆、絵の描いてある黒いチャックのついた鞆を持っている。S男の鞆は黒い紐付きのハンドバッグで、靴も黒の女の子の靴だった。入園当時のままなので、「お母さん、S男君も皆と同じものに変えてくださいね。それからお弁当も、こんな感じで作ってあげてくださいね。」と、お弁当を見せて保母さんは私に言った。私は笑って「ハイ」と言っていた。S男は少しベソをかいていたが、私は笑って、「行ってらっしゃい。」と、手を振った。

②鳥籠を開けると、中から何かが飛び出てきた。びっくりして見てみると、籠の中には、黄色いインコと白い十姉妹が2羽入っていた。飛び出てきたのはどんな動物かはっきり解らなかったが、飼犬のP太だったような気がした。

注 M子の心の中で、問題解決に向うために必要な態勢が、とられつつあることを語っている。①はS男を皆と同じような、発達状態にしてやること、それは、M子自身のS男離れであり、心の安定性にも関わって、多少とも実現できることであろう。②の鳥籠の中に住んでいたのは、黄色いインコのS男、2羽の十姉妹は双子。そこに余分の育てる対象となったP太もいた、と表現できるM子の心。M子の「心を開く」ということを、鳥籠を開けるということによって表現している。

**夢114 (3月10日)**

テレビを見ている。ある女優さんがいて、その人は、とてもストレスが溜まっていて、自分の赤ちゃんを叩いていた。私はまるで自分のようだ、と興味がわき、F夫にも見るように呼んだ。F夫は来たが、その場面は変わっていた。

**夢115 (3月10日)**

F夫とS男が川の土手を歩いている。土手の両側は川になっていて、コンクリートの細い道。S男が落ちそうで危ない。F夫に、S男を抱き上げるように言っている。しばらく行くと、大きなプールがあった。そのプールは今は使っていないようで、溜まっていた水は、とても濁っていて汚いが、中には魚や動物がいっぱい、所狭しと泳いでいた。私は中の生き物を殺してしまおうとして、プールの水を抜いた。半分くらい水を抜き、やっぱりやめようとしたとき、水



中から黒い犬が上がってきて、クンクンと鳴き私にとてもなつてきた。

注 M子の無意識の中に住んでいる、もろもろの生きもの、その中でも「黒い犬」は夢103にも登場している。夢の中の「黒い犬」で思いつくのは、鎌倉時代初期の高僧明恵上人の「夢記」にある「黒犬」である。

河合隼雄は「明恵 夢を生きる」の中で、「黒犬の夢」について次のように述べている。「高く高く兜率天にまで至った明恵は、この夢では一匹の黒い犬と随分と親しくしている。人格の発展の過程において、高く昇ること、深く下降することは共に必要である。兜率天において弥勒に接することも、地上で黒い犬と親しく遊ぶことも、共に重要なことである。もし、この黒犬のような夢が明恵の「夢記」にまったく出て来なかったら、筆者としてはおそらく、明恵の自己実現の過程に懐疑の目を向けたであろう。高いものも低いものも、善も悪も、すべてがその過程には含まれてくるのである。黒い犬が足にまとわりついてきたとき、明恵は自分はこの犬を年来飼っていたのだと思う。そして、“今日出でし時見えず、此の門に到りて待ちけり。いつ此処へは来たりけるやらむ、今は相朋<sup>あいともな</sup>ひて離るべからずと思ふ”。このような記述に接すると、ますます華嚴的だと筆者は感じてしまう<sup>9)</sup>。」さらに、「ふと一匹の黒犬を見る。それが足にまとわりついていくとき、“この犬を年来飼っていたのだ”と明恵は直覚する。言ってみれば、すべての人はその心の中に黒犬を飼っているのだが、それに気づく人と気づかない人とが居るだけなのである。この犬は自分の犬だと気づくこと、それは“無力”の要素の存在に気づくことに他ならない。そこで“今は相朋<sup>あいともな</sup>ひて離るべからず”という明恵の決心が、大きな意味をもってくる<sup>7)</sup>。」ともある。

たしかに、「黒犬」はすべての人に飼われていることに、筆者も共感する。ここにもう一つの考察を加えてみるに、明恵上人は58歳の夢に、「年来登り得ざりし処に、今己に登り了んぬ」と、あるような、「高みに登る作業をやり抜いた」高僧であった。その高僧の「黒犬」は、「小さき馬の如く、わかき犬にて、毛色、光り鮮やかにきらめきて、櫛を以てけづれるがごとし云々<sup>9)</sup>」と、誠に立派な「黒犬」であった。迷いの世界で苦しんでいるM子の「黒犬」は、濁った汚いプールの水中から出てきており、夢103にあるようにハムスターに襲いかかろうとするような、困った状態にある。「黒犬」は、われわれの無意識のさまを表現し、それがまた、いろいろの動物に変身して、深い心の様子を伝えているのではないかと思う。われわれも、自己実現の過程において、この「黒犬」を、どのように飼い慣らしていくかの、プロセスを持っていると言えるだろう。

#### 夢120 (3月12日)

①私はライオンと虎を飼っている。まだ子どもだがかなり凶暴で怖い。ベッドの上でうっかりハムスターを離したまま、部屋を出てしまった。慌てて戻ったが、ライオンがハムスターをがりがり食べていた。私は驚き、ショックで倒れそうだった。洗面所に行き飛び散った血を濡れた雑巾で拭いている。ハムスターは洗面所で殺されたことに変わっていて、洗面所には無惨

にも、ライオンの食べ残したハムスターの頭が残っていた。

②実家の台所にいる。皆の楽しそうな話し声が聞こえている。皆に判ってはいけないと思い、流し台についた血を拭くが、ハムスターの頭だけはどうしても触れない。迷いながら皆の所に行くと、お祖母ちゃんが、「あのライオンは生後どれくらい?」と、聞いた。私は「まだ15日くらいよ。」と、答えた。そして、「もう動物園に電話して、引き取ってもらおうと思う。これ以上大きくなったら、私も恐くて飼えないし……。」と言っている。「今日は学校は?」と、聞かれ、「行かない。」と、答えた。とにかく早く、あの残骸をなんとかしなくては……と思っている。

M子の近況報告。「乳児院に行って、以前は双子を見たらイライラして、来なければよかったと思った。早く立ち去りたいと思っても、保母さんの手前、そうもならず我慢した。今では双子を見てもイライラしなくなった。乳児院では子どもを抱かしてもらうにも、貸してもらような扱い。なるべく早く取り戻したい。姑が来ていないかと、いつも面会簿を調べてみる。F夫は、子どもをあまり可愛がらない。私が可愛がったので、私に従って可愛がった、という感じがする。近頃、F夫がイライラして、意地悪のような行動をする。それで目下喧嘩中。」

M子は、「なるべく早く取り戻したい。」と、言った。姑に、この双子もとられたくないという思いがして、いつも面会簿を調べていたのだろう。双子も私の子という意識が、だんだんしてきたようであった。筆者は、M子に「あなたはカウンセリングしているからいいけど、F夫はただ黙って待っている状態で、疲れが出てきたよう。“待つ”こともたいへんしんどいのだから、F夫への不満はなるべくこちらへ持ってくるように。」と、言っておく。

(3月18日)

夜9時半、M子から泣きながらの、訴えの電話が入る。今日昼間、F夫が家でゴロゴロしていたので、「実家へ行って、晩ご飯食べておいで。」と、言ってあげた。F夫は実家に行って皆と会い、つらくなったのか、帰ってイライラしていた。最近のF夫の態度は、お前が悪いと変質者扱い。それが全部行動に出てくる。喧嘩ばかりして、私は実家に帰ろうかとも思う。それしかないのだろうか。子どもをぶったりしたのは、たしかに行動として悪いことをしたが、そのことは、心が病んでいる状態だったからだということが解ってもらえない。カウンセリングに行っても、「どうなのか。」と、聞いてもくれない。今日、乳児院に行ってきて、イライラしなくなり、可愛いという感じが出てきた。それなのに、F夫は「我が儘やから」とか、「どうでもいいやんか」という投げやりな態度。それで、「今でも死んでいいと思っているくらい……。」と、つい言ってしまったので、F夫はまた出て行ってしまった。先生に注意されたばかりなのに、言わないでいいことを言ってしまった、と、泣いている。

M子はよく頑張っている。囲りの人が、M子に耐えて、勇気づけてくれれば有り難いのだが、

F夫に対しては、無理な要求であろうと思い、筆者がF夫のためのカウンセリングを考えていた矢先のトラブルだった。

この後、F夫の実家に電話して、F夫の母親に、M子の近況とF夫も疲れてきている頃と説明する。夫婦喧嘩のことは伏せておいた。F夫の母は、その後、いろいろ知っている人を尋ねて、「手を出さないで待ってやるように。」と、言われたようであり、「私は、M子の出産時の入院中の扱いがよくなかったように思う。」と、嫁のM子の悪口は一切言わない人であった。

その夜、F夫は実家に帰らず、車の中で寝て風邪をひき発熱。翌日、家に戻って一眠りした後、電話に出た。筆者は、「疲れが出ているだろうと心配してたのよ。M子はうんと良くなってきているから、もう少し頑張ってるね。」と、頼んだ。F夫も久しぶりで、自分のつらさを話して、3回目のトラブルは幕となる。

### 第12回面接（3月28日）

今回のトラブルについて、夢分析の前にM子は話した。F夫は熱を出し4日欠勤し、S男も熱を出していたので、看病で疲れた。毎週カウンセリングに来ていたので、来られないと鬱になる。まだ赤ちゃんを預けておきながらであるけど、今、赤ちゃんを痛めつけたことを思い出すと、なんてひどいことをしたんだろうと、震えてくる。F夫はあまり話さないけれど、珍しく話したのでじっと聞いていたら、F夫も、子どものことを少しも可愛いと思わないと言う。私も麻酔で出産したので、知らない間に生まれたような状態だったから、実感として、赤ちゃんですよと見せられても、S男の時のような感動がなかった。この人も悩んでいたのかと初めて知った。「男の人はお腹を痛めるわけではないから、そんなもんでしょ。そのうち愛情が湧いてくるようになるんと違う？」など言っておいた。F夫と喧嘩するとき、親のこととか、子どもの些細なことが原因になっていた。F夫は、「自分と子どもの間に壁があるが、親と自分の間に壁ができて、自分と子どもの壁がないのが本当なんやろな。」と、自分の自立のなさを幾分考えたようであった。F夫は自分ができることしか言わない人だから、壁の話をしたときは、難しいことだけどやってくれるだろうと、ホッとした。これまで喧嘩があった折々、もうだめだ、これがだめならもうだめだ、明日は離婚届の用紙をとりに行こう、などと、何度も思ったことがあったが、その点、F夫は離婚のことは一度も考えなかったようで安心した。

### 夢126（3月14日）

飼犬のP太があらこちらに便をした。母にそれを処理するように言われる。軟らかい便で方々に飛び散っているので、片づけるのに抵抗がある。便を取りながら、その嫌な臭いに何度もえずき吐いた。最後に妹が来て手伝ってくれた。

注 夢の中で汚物を始末することは、心の浄化作用に通じる。

### 夢129（3月16日）

道を歩いて行った所に砂漠があった。P太が茶色い同じ大きさの犬と遊んでいる。P太の友だちらしく、最近よく遊びに来ていた犬だった。2匹の犬はお互いに変な声を出し合っているが、砂漠で嬉しそうに駆け回っていた。私が誰かと話している間に、犬たちは砂漠にいっぱい便をしていた。私は「この便を始末しなければ……」と、思っていた。

注 砂漠は何もない淋しい所だが、たましいを浄化させる場所ともいわれ、日常生活とは次元の違う場所であり、瞑想的な静けさを表わす。そこでの浄化作業は一段と精神的なものの成長を意味しよう。砂漠はまた、太陽とかライオンなどのイメージとかかわって、創造的な力も感じさせる。

夢130 (3月17日)

家の中に山口百恵の犬だという、白い小さなプードルが紛れ込んできた。私たちに結構なついてきた。可愛いが他人の犬は性質が解らないし、いつ噛みつくかも知れないので、少し恐かった。私はふと思った。この犬なら家の中でそっと飼えるし、散歩もそんなに必要はないだろう。飼い犬のP太を誰かに引き取ってもらおうかな……。でも、今さらP太をほかせない……。すぐそう思い直した。

注 幸福な結婚をした元女優の所で飼われていた白い小さな犬が、M子の家に入って来た。現実にP太は、双子の赤ちゃんを育てられないでいたM子が、それと知らずして「育児作業の代償」にP太を飼ったものであった。M子が双子を引き取るようになるならば、P太の処分が起こってくるだろう。M子は、やがてP太を手放すことになるのを、予感し始めたといえるだろう。夢の中におけるM子と飼犬のP太の関係は、M子の心理治療の推進を知るメルクマールの一つになっている。

夢134 (3月18日)

生家の家のベッドで、3人で寝ている。3人とも女性で私が真ん中。両脇の2人が、壁に掛けてある古い写真、ある死んだ女性の写真を見て、その人の若い頃の思い出話をしている。写真の人の服装は戦時中の服のようだった。私は死んでいるが、2人の話を聞いている。写真の女の人は、過去の私らしい。

注 M子の心の変容のプロセスとして、生・死・再生の通過儀礼的表現を見てきた。「死んでいるが生きている」とか、「生きているが死んでいる」という状況の夢がそれであり、この夢もその一つである。

夢135 (3月19日)

F夫が毎週楽しみにしていた番組が、今日で終わるらしい。来週から新しく名前でも変えて、また始まるのかなと思ってみていたが、この番組はこれで終わった。F夫ががっかりするだろうと思って、可哀想だったけど、私は少しホッとした。

注 F夫が見ていた一連の物語。それは客観的に見るM子自身の生の物語、または夢の物語であろう。これまでの物語は一段落し、これからまた新しい段階での夢物語が始まると予想さ

れる。一歩前進である。

夢136 (3月19日)

クリスマスに買った赤いポインセチアの鉢植。今は葉もほとんど取れ綺麗でない。ある日水をやると、少したってから見る見るうちに葉も増えて、買った時のように綺麗な姿になった。水をやって良かったと、改めて眺めている。

夢145 (3月25日)

A子とB子のいる所へ、S男を連れて会いに行った。そこで女の人に、「3人ともお母さんにそっくりだわ!」と言われた。私は前にもそのように言われ、また今回、別のにも言われるなんて……「やっぱり私に似てるんやわ。」と、嬉しかった。A子とB子がなぜだか可愛く思えた。

注 M子は暴力をふるったA子に対して、夢の中でも受け入れにくい抵抗があった。しかし、ようやくA子とB子を共通に感じ始めたようだ。深層心理次元のことだから、これが直ちに意識に結びつくものではないが、このような深い次元からの出直しがなければ、本当の受け入れはできないだろうと思われる。そして、この進展も、すんなりしたものではなく、2歩前進し1歩後退とか、途中のトラブルで、一時中止するといったような展開であるが、雨が降って地固まる式に、プロセスにおける必要な後退とか一時中止と考えられる。しかし、連続した流れの中での、方向喪失は無い。

夢150 (3月29日)

皆が順番に川の向こう側へと飛び越えている。私は一緒にいた女の人に手を差しのべてもらい、川を飛び越えた。

この夜、M子の母親にも電話をして、カウンセリングの近況と夫婦喧嘩の一件落着を連絡しておいた。M子の母親はその際、次のようなことを語った。「M子は何でも話すが、夫婦の問題だけはあまり話さないで心配していた。先生に言われることは、たいへん力づけられるらしく喜んでいる。今日は“気晴らしに服でも買いに行ってみようか。”などと言った。やっと心にゆとりが出てきたのだなと思った。一つ気にしていたことで、“A子が義姉に似ている”と、言ってしまった。M子が、特に義姉と性格があわないようで、それでA子につらく当たってしまったのではないかと、たいへん気になった。」と。

第13回面接 (4月9日)

夢149 (3月28日)

① 炉端焼きの店の中で、F夫と姑と叔母の3人が食事しながら話しをしている。姑が「この前乳児院に行ったの、B子がどうのこうの……」と嬉しそうに話をし、その時写したというポラロイド写真を何枚か出して皆に見せた。その中の1枚を指して「これはA子よ。」と言っ

た。でもそれはA子の顔ではなく、顔だけの漫画だった。他は全く知らない人たちが写っている写真だった。私はカッとなり、「勝手に面会に行かないでくださいね。あなたはお祖母ちゃんだけど、それ以前に私の子供なんですから。」と言った。姑は黙って聞いてはいたが、顔色はかなり険しくなっていた。

②F夫と姑と私の3人は店を出て歩いている。私は「今日こそ、今までの思いや、言いたいことを全て吐き出すつもりです。根本的に私はおかあさんのこと好きじゃない……いや嫌いじゃないんです。後で心の中ぜんぶ吐き出すつもりです。」と、言った。

注 M子の姑に対する本音、「子どもたちは孫である前に私の子どもです。」が出ている。

夢154 (4月4日)

①どこかの家を男女の友だち何人かで訪ねた。その家にも何人かの人がいた。皆が話しているが喧嘩ばかりしている。敵かと思えば味方になり、仲好くしていたかと思えば仲違いをして、誰が敵か味方だか解らない。

②先輩の男の人が、自分の見たという夢について話していた。私は「どんな夢見てるの？」と聞いた。男の人は笑いながら言った。「Mちゃんのたましいと入れ代えてから、自分が何かに変わって……、その先は怖いから言わないし聞かないほうがいい。」と。「それってすごい夢よ！」と私は言った。

夢157 (4月5日)

前にやった保育のテストが返されることになった。先生が優秀な生徒が3人いたと言われた。100点が2人いた。98点でよく頑張った人もいたと、その名前を言った。それは私だった。私は自分でも良い点じゃないかと自信はあったが、そんなに良いとは思っていなかったの嬉しかった。その後私はB子を抱いて、友だちの席へ連れて行って見せている。皆が私に似ていると言ってくれた。

M子の報告。3月中夫と喧嘩、4月に入って少し喧嘩したが何とかやれた。パチンコでF夫はよく家を出る。私はその度に別れようと思ったが、F夫は「遊びぐせがついて……。」と、自分から話し、私の思い込みもあったことなど、2人とも反省した。S男は、保育所での食事一番先に食べ、おやつも全部食べるようになった。S男から手が少し離れたことは、思いがけないことだった。

第14回面接 (4月16日)

夢168 (4月12日)

学校で、背中に重たい物2つをおぶって、どこかを何周かして戻ってくるという競争があった。私も背中に2つ背負わされた。初めずしっと重くて、こんなで歩けっこない……と言ったが、結構私も楽しんでいて、自分でも信じられないほど体がすいすい動くのに驚いた。皆の応

援と共に頑張った。ここまで来れば何かがもらえて、またあそこまで行ければこれがもらえてというようになっている。私はどんどん通過して行き、ゴールまで辿りつくことができた。皆、私のことをすごいという目で見て感心していた。

M子の話。昨日母とS男と乳児院に行った。いつもより長時間居て、食事を食べさせたりだっこして散歩したりもした。そこでは、余所の子のように面会しているので、母親としての愛情がしっかりしているかどうか解りにくい。家で育てることを試したい気がする。けれど、母とふたりで、一人一人に食べさせたが、これをひとりのできるかと思うと難しい。母もまだ連れて帰るのは無理という。

昼のテレビで、31歳の母親が2人の男の子の下の子を、いじめたというニュースがあった。その人は、社宅生活でのストレスがあったよう。私も結婚して2年間社宅に住んでいた。社宅の人たちは地方出の人が多く、都会育ちの私には、どこそこのご主人は帰宅が遅かったという類の噂話には入ってゆけなかった。殊に血圧が低く早く起きられないので、ふとんを干す頃には、皆がもう掃除もすましてふとんを干す私を見ていて、監視されているようだった。F夫は「社宅は家賃が安い。囲りを気にするな我慢せよ。我が儘だ。」などの意見であった。引越しは、F夫の機嫌のいいときをみて、3日に一度とか少しずつ説得して、やっと実現したことだった。ニュースの人も社宅住まいで、かなりストレスを受けた私のようなようだったと思う。

たしかに、最近、幼児虐待のニュースが多くなったことを筆者も気にしていた。

#### 第15回面接 (4月26日)

##### 夢179 (4月20日)

教室にいる。テストが返された。私は全科目とも結構良い点数だった。F夫が改めて感心していた。全部F夫より勝っていたからだ。外は薄暗く空は稲妻でピカピカ光っていた。大雨が降り雷がなっている。誰かが「机の下へ避難せよ!」と言った。皆、隠れている。私は隠れながら外が気になり、面白半分窓を少し開けて外の様子を見たりしていた。

注 現代のわれわれにとって、雷鳴と稲妻の現象は知的にみれば神秘的なものではない。しかし、その迫力はやはり強いインパクトをもつ。夢の中では、イメージとして天から下るインスピレーションであり、新しい洞察を得ようとする状況といえるだろう。

##### 夢181 (4月21日)

生家に私とF夫が住んでいる。そこに姑と兄夫婦が来た。私は布団を片付けた。長い間寝たきりの生活をしてきたが、思い切って起きてみると意外に体が楽だった。もう良くなっているのかなと思った。姑を前にして私は言いたい放題のことを言っている。兄夫婦は黙って聞いていた。兄のほうは「理解しているよ。」と、いうふうだった。私は「今日は床上げパーティよ!」と、明るく言った。

夢187 (4月24日)

私と何人かの女の人がある部屋にいた。突然救急車が止まる音がして、ぱたぱたと人が入って来た。顔や体が血だらけになった男の人が運び込まれた。ここは外科病院らしい。

「あなたたちは早くあそこの部屋へ行っていなさい。」と、言われて、手術中のすぐ隣の部屋へ行かされた。その部屋は一部がガラス張りになっていて、手術する場面が全部見える。私は、恐いやら気持ち悪いやらでとても見ていられなかった。周りの女の人は手術をちらちら見ながら何か話している。どうやら頭の腫瘍を取り除いているようで、その切りとったものを医者は家族に見せていた。その後また重病人が運び込まれてきた。私たちは病人の身内の小母さんに「あなたたちは関係ないでしょ、早くあちらの部屋に入っていなさい。」と、さっきの部屋へ背中を押されて入った。今度は中年の女性らしき患者だった。骸骨のように目など全部取ってしまい、新しく入れ替えるという大手術が行われていた。医者の中で身内の人とたくさんの教習生が見ていた。

注 頭部の内の悪い所を取り、新しく入れ替える手術とは、考え方、見方を徹底して新しいものにしようとするという再生の意味がある。M子はその手術を見える場所では恐くて見ないで、見えない場所で見るということをしている。この話は一つの譬喩だが、人間は真実を直視するのが恐いとき、別の形でそれを見ることがある。意識で見ないで無意識または夢で見るというのもそれに当たるだろう。

夢188 (4月24日)

A子とB子が家にいる。私は「A子! B子!」と、何度も何度も声をかけてあやしている。2人ともニコニコ笑ってとても可愛い。頬ずりしている。

F夫と喧嘩したという話から、M子は「自立」についてかなり時間をとって話をした。「S男の保育料は合計7万円ぐらい。今、実家でアルバイトしているが、余分の時間をつけてくれるのアルバイト料。実家からこのように特別にしてもらうのは嫌だった。F夫は、先月夜勤を1週間休んだので給料が少なかった。こんな状態で、F夫に、勤務外にもアルバイトでもして頑張ってもらわねばと話したので、怒っていた。私は体が華奢で体力が無いので、その分頑張ってもらいたいのに、F夫はその自覚が足りない。親の負担になることは嫌で、親にはよくしてあげたいと思っている。」

これまでの心理療法では、M子が、子どもたちを受け入れられる心情になることに焦点を当てていたのだから、筆者側からの夫婦の問題はあまり深入りしなかった。ここまでくれば、この問題も検討しなければならない。M子の自立が観念的であり、自己中心的であること。F夫が怒るのは当然であること。人間の一生には、助けてもらうことが必要な事態も起こり、その時は素直に助けてもらえばいい。今、親に報いたいと思うのなら、早くよくなって親を安心させることで、自分の小さな自立の枠で処理しようとするのは無理であること。その無理をF夫に



全て負担させようとするのは、全く心得違いであること。そこで、今日は帰って、「先生に叱られた」ことを言い、F夫に謝りなさいと注意した。M子は、「父にも言われたことがある。今、先生に言われて、そうだなと思う。」と、神妙だった。

(4月27日)

M子から電話。F夫が家を出て行った。自分が悪かったように思う。被害者意識をもって、自分に従えという感じでやってきていた。F夫は私の悪い点を指摘してくれたりして、思いやりも見せてくれていた。それなのに、前はもっと親切にしてくれたのに、今はそれをしないで逃げていると言って、F夫を追い込んでいた。これでは出て行くのが当たりまえ。F夫は私の枠の中で、子どものように動いてくれた。昨夜、先生に言われたことでF夫に謝ろうと待っていたのに、帰りが遅かったのでイライラして、私の手の中から離れていった子どもを思うように怒ってしまった。そこに帰って来たF夫は何も言ってくれなくて、話ができずまたイライラし、「一緒に暮らしたくない出て行って！アパートでも借りて出て行って！」と、言ってしまった。これからのこと、子どものこともあって、食べていけないので離婚はしたくない。

M子は自分の欠点にも気づいてきて、謝りたいという思いがありながら、自分の思う状況で謝れないためいらいらが起こるといふ不安定さを見せる。これまでにない感じで後悔をしている様子。一応F夫に連絡をとることを約束。

(4月28日)

F夫の実家に電話をする前に、母親から見たM子の様子を確かめておく。「M子の心の回復は進んでいる。以前は落ち込むと回復するのに3日かかったが、今はその半分ぐらいで回復できる。食べるとか着飾るとかの生活面での気力も出てきている。一方感情面での回復があっただろうか、喜怒哀楽が強く表われている。このような理解は、F夫にはできないと思う。常識論ではどうにもならない現実だから、F夫に“我慢して”と言うことはできないでいる。M子も“私が謝らんと納まらんやろ”と言っている。」と、母親は語った。

実家に戻っているF夫に電話を入れる。F夫に、「M子の一方的な在り方について、前回のカウンセリングであなたに謝りなさいと注意したところだった。これまでになく反省のきざしが見えた。今あなたに、家に戻りなさいとは言わない。よくこれまで我慢してきたのだから、家を離れてゆっくりすればいい。ただ、M子に反省のめざめがあることだけは、頭の片隅に入れておいてほしい。」と言っておく。F夫の言い分は「3人の子を養うからあなたはもっと働け。マージャンするのはけしからんと言いながらも、自分は実家からもらったお金を、子どもの服でも買うのならいいのだが、それは自分のお金だからと自分の服を買ってしまう。」と。現実面からいうならば、F夫のいうように我が儘としかいいようがないが、母親の視点もM子の現実なのである。

このとき、初めてF夫の姉と話す機会を得た。弟を案ずる姉として、具体的に語るM子のこととは、一度は語っておきたい事々であろうし、当然の思い入れとして聞かせてもらった。ただカウンセリングの目的は、双子をお母さんに捨てられた子にしないためのもので、一方的にF夫の実家のほうに、無理をいう状態になっていることを詫言じた。カウンセリング開始以来4ヶ月。F夫の姉も冷静に対応してくれて、了解を得ることができた。その後のF夫の母親の話では、姉がF夫に、「あんたいつまでここにいるの?」と、言ったそうで、「あなたの家はここではない。自分の家に戻りなさい。」と、忠告してくれたようである。F夫も落ちこんでいて、筆者の電話で安心したようだったということも伝えられた。

(5月1日)

M子から電話が入る。F夫の実家に電話しておいたことを伝え、M子にも自分の気持ちを直接伝える方法をとるように言う。その夜F夫は家に入って来なかったが、S男に買った本を届けに来ていた。

(5月3日)

M子の母親がF夫の母親に電話を入れ、連絡がついて、M子はF夫に会った。M子は、「そのときのF夫は本当に疲れているようで驚いた。F夫は“すぐ家に戻るという気持ちにはなれなくてボーッとしていた。実家に居たいというのではなく、居場所が無い感じ。”と聞いて、ショックだった。“双子の赤ちゃんが生まれてこうなったというのではなく、結婚した当初から、一方的に押しまくられるような疲れがずっとあった。”と言うのを聞き、私が反省したことをF夫に伝えることができた。」と、報告してくれた。

この日、M子は乳児院にも行った。「これまで院長先生に対して、とても話してゆけるような人ではないと思い込んでいたが、この日初めて、この先生の所なら赤ちゃんを預けていても安心だと思った。A子は熱を出して床に就いていたため、B子をずっと抱いて先生と話した。B子は私の顔を下からじっと見つめ、嬉しそうにしていた。私も、とても可愛いと思い続けた。乳児院の先生たちは、以前はとげとげしくどうしようもなかったが、今日の、この変わりように自分としては意識ではどう考えていいのか解らないが、先生たちが、‘よくここまで回復した’とたいへん喜んでくださった。」と、いうことも報告された。なお、「夢のことはよく解らないけれど、何か不思議な感じがしている」という。M子の語る周囲の変化は、周囲が変化したのではなく、M子の心の変容によって、外界の見方が変化したことは明らかである。

第16回面接 (5月7日)

その後の報告。F夫は家に戻り安定している。戻って2日ほどしてからF夫は、「家出して困らせてやろうという気はあったが、実家に戻るつもりは無かった。自分の母には内緒にして

ほしいことだが、パチンコや競輪をしたし、服を一着買った。これはM子の最も嫌がることをしたという思いがあって、余計、家に戻りづらかった。お金は、カードで10万円使った。」と話した。このことをM子は母に話したら、「10万円くらい使ったのは大したことではない。もうお金のことは言ってはならない。それで済んだのだから有り難いことだった。」と、母に言われた。喧嘩したくないのに押え切れないことになって、お互い様だったと、F夫と話し合った。4回目のトラブルはこれで終了した。

夢192 (4月26日)

前に住んでいた家にまた住んでいる。とても満足を感じていたが、昔は現代風で格好良かったこの家も、やっぱり古くなっている。今は昔ほどの価値がなくなっているということを初めて感じた。

夢196 (4月29日)

私は川の橋の上のような所に立っていた。来週は大学受験だ。周りはざわざわしていた。私は今、病気で頭の中がもやもやしているので勉強することができない。もっと体調が良ければ私もぜひ受験したいのに、それがとても残念だと人に話していた。その後、私は何かの乗り物に自分から乗った。フワッと何かに吸い込まれるようだった。白い煙に包まれている丸い細いトンネルのような筒の中を冒険しに行った。辿り着いた部屋に大勢の赤ちゃんがいた。私はその中から小さい子を2人見つけた。「A子! B子!」と呼びながら中に入って行ってみたら、それはA子やB子ではなかった。

夢198 (4月29日)

お寺の中のとても広い広場にいと、白い犬2匹を連れて女の人が散歩していた。その犬たちはそっくりで双子の犬かと思った。犬と私は目が合った。犬はとても恐い目で私を見た。今にも襲いかかられそうで恐くなり、S男を抱いて少し入った狭い場所に隠れた。

夢200 (4月30日)

公園で私はP太と走り回っていた。公園には大きな円になっているコンピューターの機械のような物が置いてあり、私はある男の人にその説明を受けていた。機械の円の一部分に隙間があり、そこから白くモヤモヤした光のような不思議な力が出ている。その横に私がついて、その光について教えてもらっている。この光によって磁石が引つくように隣同士の機械が繋がっていると教えてくれた男の人は、話しながら、「すごいだらう!」と目を輝かしていた。私もそれに見入ってしまっていた。

注 大きな円になっているコンピューターの機械のような物とは、さしずめ「たましい」で、その癒しのメカニズムをイメージで表現したものであるようだ。教えてくれた男は、M子の元型としてのアニムスといえるだろう。

夢201 (5月1日)

① 夜、ビルの中から大勢の人たちと一緒に空を見ている。突然UFOが現れて私たちに攻撃をしてきた。少し消えたと思うとまた攻撃をしてくる。私たちは隠れてこちらの対処を考えている。

② 夫の家族たちに混ってニコニコ笑って雑談している。自然に溶け込める自分や、あちらの私に対して抵抗を感じていない様子が不思議だった。

夢205 (5月3日)

てんとう虫の成育過程を誰かに説明されながら見ている。初めは何でもない赤い丸で、それが次には固いケースに入っていて、てんとう虫の形になるまではなかなかたいへんだということが解った。

夢208 (5月4日)

F夫が帰ってきた。今まで私が悪かったので、自分がこれから言い過ぎないようにするため、自分の心の中をいじって細工をした。コンピューター式のように、言い分けを少しずつ貯めてから吐くようにと変えた。何人かが私の周りにいて皆そうした。F夫はずっと横にいた。

夢212 (5月6日)

B子に会いに行っている。姑と私と身内の誰かがいた。B子が誰かに抱かれてやってきた。私はいち早くB子を抱こうと走って手にしたが、すぐ姑にとられてしまった。とても腹が立っている。その後またとられないようにと、びくびくしながらB子を抱いている。

第17回面接 (5月17日)

夢220 (5月10日)

A子とB子が丸いターンテーブルの上に、ふとんを敷いて眠っている。2人共よく眠っているはずなのに、「ケラケラ」と笑い声がした。近寄ってみるとB子が夢を見ているのだった。可愛いなと思った。

夢221 (5月10日)

私の実家の皆とハワイに来ている。ホテルの高い階の部屋に泊っている。私はA子を連れてくる。皆は遊びに出たり入ったりしていた。どこへ行ってたのと聞くと、「下で面白い所があるねん。」と楽しそうだ。私はA子がいるので何処へも行けないのが残念だったが、仕方ないと思ってあきらめた。窓から妹が右手にA子を抱いて急に立ったまま飛び降りた。私はA子を探していた。気がついたら傍にいたのでホッとした。A子に食事をさせるのを忘れていたので食べさせている。F夫も外へご飯を食べに行っているのでもつまらない。窓の下を見ると丸い島みたいなのが見えた。皆はそこへ行って遊んでいるらしい。父も母もそこへ行ってきたと話している。島の山の中で宝を探すゲームをしているらしい。父たちはこれからヨーロッパへ行く張りきっていた。私も誘われたがA子がいるのでやめておこうと思った。

注 現実においても、無意識内を表現する夢でも、M子はB子に対しては比較的早く可愛い

と思えたのだが、暴力を加えたA子に対する思いは、実に深く重い。ここでは、ひたすら育てなければならないという自らの母性の責めを感じている。

夢220 (5月10日)

①母が私の家だという所の台所の模様変えをしてくれていた。以前にもう邪魔になるからと言って、私が納っていた白い食卓を出していた。その横には丸くて白いテーブルが置いてあり、赤ちゃんのコンビラックも出してきていた。私はこれなら子供たちにちょうどいいわと思った。

②広い応接間の部屋へ私は入ってきて、大きなソファに座った。今日はカウンセリングの日で来たのだった。先生は向かい側のソファに座っておられた。私が座るなり、「もうあなたはカウンセリングの必要はないと思っているのよ。一応7月9日で最後にしようと思っているの。」と先生はおっしゃった。私は「えっ！ まだそんな自信はありません。先生がいないとまだ不安で……。」と、おいおい泣いている。ほっとした反面、不安があるのも事実だった。

注 M子がA子に対する育児の責任を表現した夢に続いて、この夢では、いずれカウンセリングが終了することを予感している。しかし、7月9日がどのような日なのか、まだ先のことなのでここでは全く解っていない。夢では先生が言ったことになっているが、夢主はM子である。M子はやがてカウンセリングの終了を予感できるまでに回復したことは確かである。

夢225 (5月13日)

居間で寝ていて目をさますと、台所にP太が寝ていてこっちを見ていた。その横には見たこともない黒いシェパード犬が仲良さそうに並んでいた。P太はいつの間に、どうやって家の中へ入ったんだろうと不思議だった。どうやら鎖を噛みちぎったようだ。私が起きたのに気づくと、黒い犬はこっちにやってきてまとわりついてきた。P太は自分の餌を胸の下へ隠していた。餌をとられないかとおびえている様子だった。私は黒い犬がお腹をすかしているのが解ったので、とにかく早く追い出したかったし、恐くもあつたので、とりあえずP太の餌を食べさせた。それを見てP太はすねていた。「あんたは後で作ってあげるからね。」と、P太に言っている。

注 双子に代わってM子に育てられていたP太は、「黒い犬」の出現で、後まわしに餌を与えられることになった。このことは、P太に課された双子の身代り役の後退である。

夢226 (5月16日)

母と私はどこかの駅の中のような所で、A子とB子と待ち合わせをしている。これから何かが始まるので出発しようというとき、A子が「おしっこ！」と言った。私はA子を抱いてトイレに行った。便器に座らせるとすぐたくさんのおしっこをした。すごい量だった。私の手に生温かいおしっこがかかった。まあよくこんなにおしっこを溜めてたもんだ！と私は思った。

注 この夢ですぐ思い起こす夢がある。「殺されようとしている亀が体全体からいっぱい水をこぼした。それは涙だった。」という夢50(2月3日)がそれである。そこでは、M子の「たましい」の流す涙と解した。ここでの夢は、母親に拒絶されていたA子の「涙に値するお

しっこ」で、A子の涙が漸く母の手に伝わっている情景といえるだろう。

夢227 (5月16日)

生家の離れで、私はB子を抱っこしてあやしている。B子はキャッキョッと喜んでいいる。そのままB子を抱いて隣の同じ離れへ行くと、母がA子を抱いていた。私はA子を引き取り2人を抱いた。寝ていた父が起きあがって、私たちをカメラで写した。

M子の実家で姑に会ったことを話した。経済的なことでの相談だった。姑は「援助はできるがM子がどう言うか、一方的では……。」と心遣いをしてくれた。思っていたより抵抗なく会えて、「勝手にすみません。」と言うと、姑は「いえいえ。」とだけ。M子の病気の話は一切しなかった。離れているといろいろ思ってしまったが、会えばいいお姑さんだと思う。けれど少し度が過ぎることがあれば、またカッとしてしまうか心配。姑に会ったことでF夫は嬉しそうだったが、あせってすぐ舅を呼ぼうとした。「それはもう少し待って！」と、M子は断った。

その日、F夫の母が長居し父まで呼び出そうとしたことで、夜になってM子はイライラしたという。一歩譲ると家族ぐるみで来ようとすることにM子は警戒している。

第18回面接 (5月31日)

夢232 (5月22日)

F夫と2人でとても遠い病院に行った。精神病院だった。2人一緒に診察室に入った。女医さんが居た。机の上に2人とも頭を伏せた。「もう少し頭をくっつけて！」と、言われた。2人とも後一歩らしい。とにかく仲好くできることが治療の方法ですと言われた。

夢243 (5月29日)

①飛行機と一緒に空を遊泳している。もっと高い所へ行くと、何台もの飛行機が列になって飛んでいた。空の上では飛行機がこんなに近くで飛んでいるんだな、大丈夫かしらと思って見ている。私は陸へ降りることになる。「ミスター・マリックさん、どうぞ巧く着陸させてください。」と、祈っている。

②地上へ降りてどこかの部屋にいた。女の人が紙のお皿やスプーンなどを、私とF夫とS男の分ですよと言って3枚くれた。そしてそれを大きな箱に入れるように言った。私たちはどうやら死んだらしい。女の人が「天国で困らないように……。」と言っていた。

③空から帰るのに電車に乗っている。

注 どうやらM子は無事に着地することができたようである。しかし、そのためには、過去のM子一家は、生から死へ、そして再生へというプロセスが必要であった。

夢247 (5月30日)

声だけの夢。S男の加減が悪く保育園を休んだので一緒に寝てウトウトしていたときのこと。

もう一人の自分のような声が叫んでいる。「A子！ B子！」。そして、「早く引き取れ！」と、私を責めたてるような感じの音が2、3回した。自分で言っているようでもあった。夢の中のようにもあったが、「子供たちを引き取らないと……」と胸騒ぎがして、目がパチッと醒め、ポーッとになって、今のは何だったんだろう……と不思議な体験をした。自分自身に怒鳴られ、命令された感じだった。

M子の話。乳児院の中で子どもに会うのは生理的に受けつけない。乳児院は暗い。捨て児の集まりのよう。あそこに自分の子どもがいるということを認めたくないの、足がますます速のきそう。面会に行って、「今日はA子ちゃん風邪気味だから、B子ちゃんだけです。」と言われ、B子を貸してもらおうように受けとると、自分のみじめさをさらけ出しに来ているようであらう。外の場所で、あの子たちを抱きたい。

後に筆者もこの乳児院を尋ねたが、玄関脇の面会室は約一坪くらい、奥のベッドが並んでいる部屋は薄暗く、M子の気持ちがよく解った。乳児院のお世話する保母さんの苦勞も察することができたが、わが国の福祉予算の貧しさを思ったものだった。

M子は不思議な「声だけの夢」の話から、自分の過去をふり返り、自分の人間関係のあり方を語った。「父方の祖母は好き嫌いの激しい人だった。私もその血を引いているのかも知れない。小学校時代は目立つことが何もできなくて、友だちはこの人と決めたら、その人とばかり付き合い、後はいらぬという感じだった。一人で何処にも行けない親から離れられない子で、転地学習にも熱が出て行けなかった。就職して社員研修で東京のホテルに行ったときも、体調の崩れがすごかった。中学校に入ると目立つことをして友人が多くなった。けれど、一人の子とあまり仲好くすることで、担任の先生が、懇談会のときに親に注意したぐらいだった。高校の3年間は目立ちたい思いが強く、芸能界に入りたいと思うようになった。友人も多く、悪いことをしたりで、先生から目を付けられていた。友だちに不自由はなく、いざというときに飛んできてくれる子が何人かいる。母はそれを不思議がる。今でも友人の悩みを聞いてあげることが多い。私がこんな状態だから、よく解って聞いてあげられるのだけど、私に近いすれすれの子がたくさんいる。」

## 第19回面接（6月12日）

### 夢251（6月2日）

P太が庭の土をあちこち掘って穴ほこだらけにしている。前にP太が噛みちぎってしまった草が植えてあり、赤い奇麗な蕾をつけていた。でも一枝だけ倒れていた。「もう！ P太ったら！」と思い、隣との通路に咲いている花の横にその一枝を植えかえた。「さあ、これでいいや。」と思って、次に通路に沿って縦と横に水路を作った。そこを水が巧く流れた。これで雨の日も大丈夫だ、もっと早くこうすれば良かったと思っている。

夢263 (6月10日)

団地の最高階に住んでいる。家の中は何かの気配が漂っていて、私もF夫も脅えている。食卓の上に首の無い黒白の縞模様の猫の死体が2体あった。私はその1体をもう食べてしまったが、F夫は戸惑っていてまだ食べていない。でもそれは食べないといけない。めざしの味がするのだ。私はF夫に「早く食べてしまいよ。」と言っている。F夫は嫌々一口かじっていた。

第20回面接 (6月25日)

夢271 (6月18日)

父と母がP太の散歩に協力的になった。散歩には母が連れて行く。帰ってきたら父がもう一匹の犬に繋ぎかえ、母がまた、その犬を連れて行くという要領だ。そんな父と母を見ていて、なんだかホッとした。

夢278 (6月24日)

船に乗っている。遊園地の乗り物のように、川の中を早いスピードで走っている。昨日も乗ったが、今日はたくさん「どっきりすること」があった。私たちの船の左右で巨大な鯉が出たり、いろんな動物が川の中から突然飛び出してきたりする。とても面白かった。

夢279 (6月25日)

①ジェットコースターに乗っている。真っ暗な室内をすごいスピードで駆けぬけている。

②生家の離れでS男と2人で寝ている。なんだか寝苦しい。金しぼりにかかりそうだ。どうも体がそうになってきた。あまりの眠さにもうじっとしていると案の定かかってしまった。そして、私の体から私の体が抜けていくのが解る。左手側からゆっくり、スーッと円を描くようにふとんを這って、私から私が離れていった。でも遠くへ行ったわけではない。ちゃんと近くにおいて、私と同じ姿勢をしているのだった。その後、恐いやら苦しいやらで、もがき始めた。誰かが私の足元に居る。「お祖母ちゃん？」と、思ったが解らない。その人が私の手を握って「どうしたの？」と、起こしてくれた。私はその手をしっかり握り顔を見た。やっぱりお祖母ちゃんだった。

注 これまでのカウンセリングの展開は、無意識内の暗がりを、すごいスピードで駆け抜けてきたような状態だったといえるだろう。ここに至って、M子は自分を二つに分化させることができた。どちらも自分なのである。このようにして心の内の葛藤を解きほぐし、改めて自分を再統合させることによって、新しい自分になってゆくのであろう。このようなプロセスには、大量の心的エネルギーを必要とする。起きあがるのに手伝ってくれた人がいた。それは、母方の祖母によって表現された元型グレートマザーの力といえるだろう。すべては、M子の無意識内での元型の働きによるものであるが、心の病に対しては、自己のもつ元型がよく機能することによって治癒されるのである。



M子は「昨日乳児院に行った。面会の1時間があったという間に終わってしまう。帰る時涙が出るほど、愛の思いがふつふつと湧きあがってくるのが解る。子どもたちが可愛いくてたまらなくなってきた。もう引き受けることができる。それを確認するために、子どもたちの外泊を切望する」と言う。

その日の午後、M子の母親から電話が入った。「これまで、M子が良くなってきているのは解った。しかし、近頃のM子は少し悪くなった感じがする。飼犬のP太を預けてきた。イライラするらしく、服の衝動買いをする。F夫もそんなM子を見て、つらそうにしている。乳児院の先生には、過保護に育てたと言われっ放し。乳児院の様子は見ていて、やっぱり預けておくことはつらいことです。」と、報告された。面接では安心できるM子であったので、最速、M子に尋ねてみた。M子は「S男が保育園で伝染病をもらってきて熱を出し、その看護で疲れていたが、母がそんな見方をしているとは思わなかった。私が疲れているにしても、以前のようなイライラに結びつけて心配しているようですが、それは違う。子どもについては大丈夫です。」という返事。察するに、今のM子のイライラは、わが子たちを、あの乳児院に預けておかねばならないという母親としてのつらさからのものと思われる。M子は予想通り、P太を実家に預けてしまった。M子はさらに言う。「乳児院の先生に“子どもが可愛い。”と言うと、“あたりまえや。”と言われる。そんなふうに言われてしまうような、簡単な思いの可愛さやないのに、それが解ってもらえない。赤ちゃんを引き取ったら保育所に預けても、“後16時間あるのですよ、できるんですか。”と言われて悔しかった。私は16時間でも少くないという思いがあるのに。けれど用心して保育所には入れたい。ついでに、S男の育て方が悪いと言われた。S男の育児では、私と一緒になら2時間でも歩くのに、他の人にはすぐ抱っこされてしまう。それにしても、子どもは一人では駄目だと思ってしまう。3人あって本当によかったと思った。自分の病気を理解させてもらえたことで、自分はどうすればいいかということがはっきり解って自信が持てた。今はこういうことだったのかと、太鼓判を押すことができるほど自信がある。」と。このように言うM子に対して、筆者は、「客観的に、育児が上手にできるかについては、残念だが、乳児院の先生の言われたことについて今は反論できない。心の準備ができて、現実的具体的準備は改めて努力がいることだから、今は我慢するように。けれど、心の準備が確かなことであるという確認はあるだろうから、子どもたちの外泊を許してもらおう努力をしてみよう。」と、約束した。この外泊は、児童相談所の承諾を得なければならなかった。

ところで、双子のA子とB子のうち、M子はどうしてA子だけに暴力を振るったのだろうか。かつて、M子の母親が心配したような、性格の合わないF夫の姉に、A子が似ているといったようなことではないと思う。乳児院の先生が、A子とB子について、次のようにM子に説明している。「B子は自己中心型、にこにこ笑ってくださったくないが意地悪。A子は優しい子で妹に譲ったり、妹がほかした物を拾ってやったりする。」と。M子の観察では、「A子は、私が行くと、15分くらいじーっと顔を見つめて笑わないが、その後安心してやっとならう。最近まで泣

かれていたが、今は私の傍に来て、頭をよせかけ安心したようにしている。少し離れると私をジーンと目で追う。B子は放っておいてもいい感じ。」筆者としては、A子がよく泣き、M子をイライラさせたのは、A子の感受性の鋭さにあって、母親の不安をより深く感じた子であったからであろうと思った。

第21回面接 (7月9日)

夢281 (6月27日)

①また猫を食べている。

②私と母と妹が、川の中に建っている家に居る。部屋の窓が大きく開いている。外の川にいた茶色の犬を飼おうとしている。妹がまた別の犬に懐かれてしまったと言って、茶色の犬を連れてきた。その犬は川の中にずっと住んでいた犬で、人間を見つめ、すがるような目をしてじやれてきたという。犬も必死なのがよく解る。私はその犬を見ながら、ずっと川魚をつかまえてはそれを食べて生活してきたのだろう。それにしても結構太っているな、と思っている。その犬は、後足が少し奇形のように変だった。それが余計可哀想で、私はその茶色の犬も飼う決心をした。私たちは犬を安心させてあげるため頭や体をなでて可愛いがっている。

夢289 (7月5日)

A子とB子が外泊で家に帰っている。絨緞の埃を掃除しないと……、と思い掃除機を持って玄関を出ようとする、そこにちょうどやってきた父と母が立っていた。

夢290 (7月6日)

①テストを返してもらおうと、私はほぼ満点でも満足している。その後、この前に受けた野球の問題のテストが返された。それは、はがきでだった。私は1問しか丸が無かった。恥ずかしいので周りの人に見られないうちに隠している。

②うす暗い部屋。そこは会館のようだ。中へ入って友だちと話している。左手側のほうを見てギョッとした。ベッドがたくさん置いてあり、そこには何人もの死体があるのだ。よくこんな所にいたものと青ざめた。身内らしい人たちが入ってきて、泣いている人もいた。そんなことに気をとられて、いつの間にか、ある小母さんにテレホンカードを買わされていた。それは普通一般のものではなくて、宗教のものだった。神の祈り供養済みだと言って大きな紙を見せられている。要するにお守りらしい。

③私とF夫は車に乗って家に向かっている。「やっぱり地元がいいね、気持ち落ちつくわ。」と、話している。もう絶対に引っ越ししようなんて考えるのはよそうと実感した。

注 ①ではM子が当面の心理的問題を満点に近い形で解決したという実感の表現であろう。しかし、後に手にしたテストのできで知らされたことは、問題の解決はいくつかの中の一つであって、まだ隠したくなるような、未解決の問題が残っていることを示しているといえよう。②では、M子の心の問題が、生と死が同居しているような、たましいの体験とでもいうような

深い次元のものとして把握されている。

夢291 (7月7日)

F夫が何やら怒っている。私に腹を立てているらしい。玄関の4隅は全部、棚の靴箱になっていて、私の靴が目いっぱい並んでいた。何百足とある。F夫が長時間かかって整理しながら並べてくれたらしい。あれっ!こんなの持ってたんだと思出すのがいっぱいあった。しまいこんで忘れていたのだ。それなのに私は新しい靴をどんどん買っていた。そのことでF夫は怒っていたのだ。私は嬉しくてあれもこれもと手にとっているが、周りの人たちは、少々怒って私を見ていた。

夢293 (7月9日)

プールサイドにP太が繋がれている。プールに来ている人たちはP太に声をかけ、頭をなでていく。P太はこのプールの犬になったのかと、少し可哀想に思えた。でも皆に可愛いがってもらっているようなので……、と思うことにした。

M子に約束したように、児童相談所・乳児院の係の人にM子の心理療法の経過を報告し、M子自身に病んだ心の回復を確認させることを目的とした一泊外泊の許可を得た。筆者も責任をもって引き受けに立ち会うこと、夜はM子の母親に付き添ってもらうことなど配慮した。この許可を得たことは、乳幼児虐待の母親に対する心理療法の、核心のところの終了を意味した。もちろん、この後のケアを経て本格的な完了となるはずであった。それにしても、M子の夢221(5月10日)に「7月9日で先生がカウンセリングを最後にすると言った。」とあった。本日のカウンセリングがそれに当たっていた。

明日10日、A子とB子を引き受けるに当たって、M子は逡巡気味でその心境を語った。「恐い。申し訳ないことをしているから、どういう顔していいのかわからない。抱きしめてやりたい思いたがふるえがくる。治っているのに自己嫌悪を感じて疑問に思う。でも目の前にいたらちゃんとやれると思う。」そして、改めて心の混乱していた頃の自分を見つめ直す。「入院中気が狂いそうになる寸前までいった。そのとき、1時間、いえ10分でもいい、家に帰してほしいと頼んだ。その直後ぐらいから記憶が無くなっている。あのとき願いを聞いてもらえれば引き返させていたようにも思うが、気がついたらおかしくなっていた。赤ちゃんを見るのも嫌だった。そして、今の自分は一時的なのだと思うようにして、こんな自分を認めたくなくて自分をごまかしていた。可愛くないわけがないじゃないか。自分の子だからおしめを替えてやらねば、ミルクをやらねばという意識ばかりで、実際やっていることはめちゃくちゃだったことが今はっきり解る。赤ちゃんを看られる精神状態ではないのに、いい子ぶっての演技をしようとした。自分が心の病気で混乱を起こしていたとは思ってもよらなかった。おかしい、気が狂っているということは自分で解っていたのだが、それでも、「赤ちゃんどうしたの?」と、聞かれるのが嫌で、赤ちゃんを人にまかせるまいとした。その後、解ってもらうことが無理なことなのかと、それ

では解ってもらえるまで待つてやろうじゃないかという気も半年くらいで起こってきた。」M子は、ひとしきり話してしまえば気が落ちついたよう。筆者は、「恐いという気持ちはよく解る。本格的な接点は、一度は潜らなければならない関門であるけれど、もう大丈夫よ。」と力づけて、明日の待ち合わせについての打ち合わせをした。

(7月10日)

M子夫婦、M子の母親、そして筆者が乳児院に満1歳になったA子とB子を迎えに行く。乳児院の奥から保母さんに抱かれて現れたA子とB子は、自分たちを迎えにきてくれたのが解るのか、すぐ手をさし出してM子とM子の母親に抱かれ、嬉しそうにおとなしくしている。保母さんたちは、「今日は不思議、やっぱりね。」と感心している。筆者には、これがA子、これがB子と紹介されても双子たちがあまり似ているので、すぐ混乱して見分けがつかない。M子宅に同行し、約4時間ほど一緒にいて夕食を共にし、別れた。子どもたちを受け入れるという心の問題は、巧くいっているが、M子の動き、子どもたちへの具体的気配りが未熟であることを目にした。例えば、部屋に入って「お帰りなさい」と座らせたA子とB子の囲りに、いっぱいあるお兄ちゃんのおもちゃを、箱からザーッとあけて、「さあ、いっぱいあるから遊びなさい。」という調子。立っては尻もちをつく、急にひっくり返るなどの不安定な赤ちゃんの囲りに、固い物、とんがった物などの遊具は、遊具というより危険物をいっぱい積みあげたに等しい。食事についても、買う店が近くにある、母親がついている、夫も傍にいう状況があるにしても、赤ちゃんたちの食べ物は全く用意されてなかった。F夫がおやつを買いに走り、母親が赤ちゃんの食事の仕度をした。やがてS男も保育園から戻り、子どもたちは、それぞれ勝手に遊んだり、交互に膝に抱かれたり、お食事をしたりして、全く泣くこともなく気嫌よく過ごした。

F夫が車で筆者を送ってくれた。その車中で、「あなたもよく辛抱してくれた。疲れが出ると思うが、今後の受け入れはゆっくり時間をかけてしてください。M子の具体的な育児能力は十分でないように思うから、この点はこれから注意してあげるつもり。」と話しておいた。

(7月11日)

F夫の母親から早速電話が入る。「これからどうしたらいいか?」と。赤ちゃんたちを受け入れられる状態になったのならと、またすぐ付きあいたそうな感じの問い合わせだった。まだM子の心は、それほどゆとりのあるものではないので、今暫くはこれまでのように待つてもらうことを言う。

A子とB子を乳児院に戻した後で、M子の母親からも電話が入る。筆者と同様、M子の母親としての育児能力が無いことの心配が話された。今後は、M子の育児勉強が必要であろう。そして、A子とB子を育てることで、M子も成長してゆけるような態勢を周りでも作る必要があ

るようだ。

**第22回面接（7月31日）**

子どもたちを引き取る体験をしてから、20日後の面接である。M子はその後、F夫の休日にはプールに行く、実家と一緒に家族旅行、乳児院にも行く、アルバイトもするで多忙に過ごしたよう。最近夜中に目がさめない、夢は見ているようだがあまり思い出せないと、これまでのような記録はなく、メモしてある夢を話した。これまで、溢れるように出てきた夢も、心の葛藤が解決されると、夢も記憶されにくくなる。

M子が、A子とB子を引き取って過ごした体験の効果は大きかった。我が子を愛することができる自分を確認できたためであろう、状況を冷静に判断できるようになってきていた。今はF夫との喧嘩もなく、あの子たちがもう少し自分に溶けこめる、約束された時まで、母親としての準備をするつもりになったという。赤ちゃんを預かってもらったことは、ラッキーだったと述懐するまでに変わっていた。その後の面会では、B子がF夫になつき、そちらに手を出す。M子はA子を抱くことになる。帰りに抱いていたA子をベッドに入れると、泣いてしまう。S男も妹だという感じがあつてか、A子をベッドに戻すと「ダメッ！」と言って泣き出すなど、家族間の情愛が流れ始めたことを思わせた。

**夢298（7月29日）**

①檻の中に可愛い熊が3頭いる。その中に入って行って子熊の顔を触ったりする。まだ少し恐がっているところがある。「もう少しやね！」と私は言う。

②橋の上に立っている。長方形の船が橋の下を通過している。そのとき何かを思っていたが、その何かは思い出せない。

③海辺にいる。グループごとに皆楽しそうにしている。私のグループには中年男が2人とか、友だちふうの子などがいた。場面変わり、私は狭い蒸し暑い部屋に長時間いて、海辺の皆の一部始終を録音し、ビデオにとっている。皆と話せず、そういう作業を私はしていた。後で録音したのをその人たちに渡した。もう一度浜辺に戻って、私のやった作業を思い出している。皆の中に戻ってもよかったが、あえてその中に入らない。ちょっととり残された寂しさを独りで見詰めている。

注 ①は母子関係の表現。③では、誰にも知られず密室での長時間の作業を続けた。それは、夢分析による心理療法に集中した状況の表現である。それは、心の内界における孤独な戦いであったという、M子の感慨であろう。

**夢300（7月31日）**

お寺の階段を上った所に、F夫と私がA子とB子を一人ずつ抱いて家族の皆がいる。階段の下に記者がいて、私たちは写真をパチパチ撮られていた。それがその日のテレビの芸能番組で放映されると言われている。その時、雨が降ってきた。子供が濡れるな、と思いながらも、

動かないで写されていた。

注 M子は、「乳幼児虐待の母」という苦しかった体験を、同様に苦しむ人のために役立つならと、筆者がこの事例を公開することを承知してくれた。M子の心の中では、この夢のように、公開される覚悟がすでに作られていたことが伺われる。文中であるが、M子に対して心からの感謝を記しておく。

### 第23回面接 (8月24日)

#### 夢301 (8月22日)

遠くに大きな山があり、人が大勢いる戸外にいた。そのとき、山の頂上から空に向かって白い煙が大量に出てきたので、人々は騒いでいる。そのうちに山が崩れ溶けて流れ出し、山が3分の2くらいになる。これは危い！と逃げたら、このような危いことが反対側でも起こり、逃げようとしたほうからも危険が迫ってきた。だが、結果的には無事だった。やれやれと一安心する。

そのとき、右のほうに家の入口のようなものがあり、そこへ入って行くと地下の洞穴があり、その中を下りて行った所に住居があって、何世帯かの人が住んでいた。地上では気づかなかったが、こんな所に住んでいる人がいたのかと思った。

注 常人の知らない地下の、つまり意識下でそれなりの生活があったという発見。全体は、M子の精神体験の象徴的表現である。

今回の面接では、夢一つ。M子は、子どもを虐待したことについて、今はなぜあんな気持ちになったのか不思議。しかし、双子たちに対して出生の自覚が無かったこと、出産後も離れていたことで、S男のような親密感が無いことを語った。これは、今後の時間の中で解消されていく問題だろう。F夫とはちょっとした言いあいはあるが、根にもたず解決できるようになっている。また姑には、話したいことのすべてを話し、聞いてもらっている。姑自身も自分の生い立ちを話し、長女とはどうも気があわないといったことが話された。近頃、姑は占いに凝って厄払いを急ぎ、大金を騙しとられようとした。怪しいと思ってM子夫婦も同行し、M子の機転で難を逃れたが、姑もF夫も心の区切りができず、引きずられてしまう人であることがよく解ったなど、M子はすっかり落ちついて近況を語った。

本日でカウンセリングを終了させてもいいが、けじめとして、最後のカウンセリングを少し期間をおいた10月初め頃、「箱庭」を作ってもらって完了することにした。

### 第24回面接 (10月3日)

#### 夢302 (9月16日)

①私と父は、本土と一本道で繋がっているが、海が周り一面にある島のような場所の山の頂

上にいる。周りには何人かの人がある様子。山の中心部の底のあたりから、円形になった火が頂上へと燃えていた。辺りはざわめいている。この火の輪が頂上まできたとき、大爆発して日本は終わるといふ。私は山頂でしゃがんでこの火の輪を覗き込むようにして見ていた。足許の火の輪は、妙に赤々として無気味だった。私たちは突然の「日本の終り」といふ事態の知らせにおろおろするばかりだった。どうぞ嘘でありますように……。火が消えて何とか収まりますように……。と祈る気持ちだった。

②私は実家にいる。父と母、S男も一緒だった。山の火のことが心配でテレビをつけた。どこのチャンネルに回しても日本の歴史を報道していた。どうやら日本の終わりは確からしい。すでにあの火の輪も頂上で赤々と燃えていた。後はいつ爆発するかといふところだった。そのときの母は、何故か暗い青色のワンピース姿だった。

注 M子はNa2の夢で、ブルーのセーターを着ていたことに強い印象を残していた。夢分析を終了しようとするここでは、母の姿ではあるが、暗い青色のワンピースが印象に残ったといふ。Na2においては、深い個人的無意識で個人の危機が表現され、Na302では、母なるものの姿を借りた超個人的無意識で、日本の危機を感じとっている。

夢303 (9月17日)

私は友だち何人かと、どこか高い所に立っている。周りの人たちが次々と空を飛んでゆく。私もやってみようと両手を広げてジャンプすると、不思議にスイスイと飛べた。恐ろしいといふ気持ちはなく、とても爽快だった。

注 M子の心に自由さが戻ってきた感じがよく出ている夢。

夢305 (9月18日)

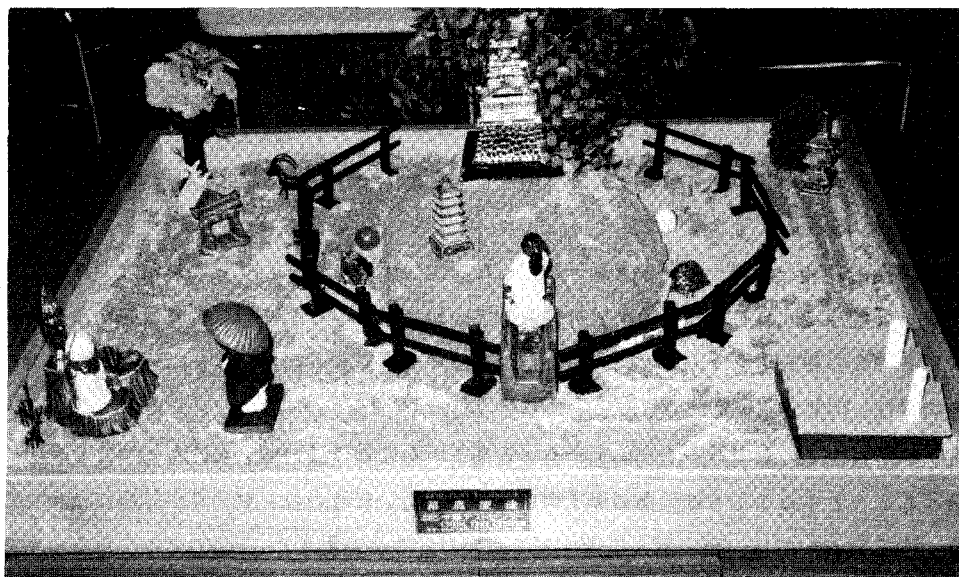
私が死んだ。学校の体育館らしき場所で、私の告別式が行われているが、皆が登校するように、毎日そこにお坊さんのお教を聞きに行くのだった。私も皆と同じように毎日登校している。

注 M子は死んだ。だが生きているM子。M子の心の内界において、生から死へ、そして再生するといふ超越的なプロセスを経て、病んだ心の治療が完了されたことを端的に語っている夢。

面接終了時のM子の箱庭 (写真2)

中央上部寄りに円形の島である山の頂上に城が立つ。城の背後の木々には、3羽の鳥がとまっている。鳥をめぐる堀は柵で囲まれており、島に通ずる橋の上に女が立っている。堀の中には4個の球と、亀と蛙が置かれている。左上部に鷲のとまっている大木、神社、鹿。左下部に切株の上に立つお地蔵さん、その背後に仏像、前に祈る僧侶。右上部は木と塔。右下部には工場が置かれている。

写真 2



注 この箱庭は、心理療法完了時のM子の心全体を表現したマンダラである。ここに再びユングのいう「自己」をとりあげてみるに、「自己は心の全体性であり、また同時にその中心である。これは自我と一致するものでなく、大きい円が小さい円を含むように自我を包含する」と説明されている。この箱庭について、心全体の中心である自己は、島の山頂に立つ城で象徴的に表現されており、橋の上に立つ女がM子の自我といえるだろう。中央の円形の柵内は初めに作った箱庭の白い円形の柵内に当たる。M子の心の「聖域」と称した領域を、夢分析によって深化させた表現である。心全体の影のほうに当たる左側は、非常に宗教的な情景が作られている。より根源的な位置に仏像が配置されているが、神を祀る社もあるのは、日本人的な宗教感覚の表現である。右下は工場によって生命的な生産性を表わしているが、右上の社会性の面では未発達さが表われているといえるだろう。

細部について少し触れてみるに、円形の堀の中にいる亀と蛙は、共に水（無意識）と大地（意識）の間を往復する生物である。亀は最初の箱庭に現われ、夢の中で重要な心の深層の表現をして、最後に再び出現したものである。蛙は、世界各地の民話に語られているが、おたまじゃくしから変身して蛙になること、雨を呼び大地にかかわって豊饒をもたらすことなどから、再生とか創造の意味がある。そして、神社の背後の大木に住む鷲は、精神性の高さ、理想、父親の権威を象徴するものであろう。状況的にたいへん印象に残る部分としては、過去を清算した如き切株の上に立つ、お地蔵さんである。子どもを守るというお地蔵さんは、その背後の仏にさらに守られ、僧の祈りの中で、自らを安定させようとするM子の深い感じ方なのであろう。この場面は、夢305（9月18日）に相応するのである。



### 3) 考 察

#### ①カウンセリングの経過

ここに記録したM子の夢は、数において約3分の1の90の夢、量にして約4分の1に当たる。M子の一連の夢は、M子の意識と無意識の相互作用による心の表現であり、殊に無意識内の言葉で説明し切ることのできない状況を、イメージによって象徴的に表現させた体験であった。それは、M子の自己実現に基づく人間の生の在り方の、どこか自然に離反した無理、筆者のいう深層心理における混乱や葛藤を、自然態へと再生させたプロセスであった。言葉の世界が意識の世界に「閉ざされている」のに対して、意識・無意識の世界に広がるイメージの領域は、実に広大で深いといえるだろう。人間の「たましい」にとって、言葉よりイメージのほうが根源的であり、生命的である。これらのイメージは、直接に感情や気分などの生命的な機能に結び付いているので、これを活かす方向へ扱うことができれば、情動や感情を変化させる力となるのである。

心理的な病や障害についてのユングの理論は、彼の目にとまった広大な素材から生まれたものであり、それらは無意識の心理過程、なによりも夢を注意深く観察することから集めたものである。夢の過程は、意識の領域における障害と並行している。もしクライアントが、これらの無意識的な心理過程に意識の立場から近づくことに成功すれば、以下の二つの結果が見られるであろうことを、確信を持って証明されている。その一つは、クライアントが宗教的なものに接近するか、あるいは、それと関係を持つということによって終わる一連の発展が見られるという結果である。もう一つは、意識と無意識の並行について、並行したものもあるが、逆並行ともいえるものがあり、この逆並行について、ユングはこれを「補償」という言葉を使っている。この「補償」によって、無意識が生み出すものが、不適切で誤った意識的な発想に反対の作用をするので、無意識から受け入れたものを意識的段階にまで高めることができれば、調和が得られることを意味している<sup>9)</sup>。以上のことは、M子の心理療法における夢でも実証し得ることである。

#### ②予 後（その後の家族関係）

M子自身は心理療法を受けて、一度は拒絶し虐待した我が子を、引き取ることのできる心理状態に戻った。と同時に、自分の育児能力の限界をも知った。しかし、F夫も姑も何等変わっていないので、夫婦関係や嫁姑関係における問題は依然として残っている。ただ、M子はF夫を通してしか話せなかったことを、直接姑に話しかける行動に出るようになった。F夫に対しては、M子が母親をしっかりとやるために、従うばかりの人でなく、父親としての自覚、夫とし

での自覚を、しっかり持ってほしいという思いが日に日に強まったようである。このことに関して、M子から相談を受けたのは翌年の4月下旬であった。その3日後に、筆者はF夫を呼び、ただ従うだけの優しさだけでは、M子が納得できなくなっていることを説明し、自覚を促した。その折F夫は次のように語った。「自分は家族皆嫌いでないが、M子に“自分の意思が無い、私にこんなふうに言われたら言い返してくるのが当たりまえや。”とまで言われると、さすが腹が立ってくるが、ぱっと考えたら、こんなことで別れていいのかと思ってしまう。話し合いということも、角が立たんほうがいいなと思う。M子は“話しあいを持とうとすると、いいやんか、という態度で応えてくれない”と、自分の親のしつけ方や生き方を言うので、煩わしい面がある。家といってもそれぞれで、自分の家でも姉、兄、弟、僕と皆性格が違う。一番おっとりしているのが僕で、M子と性格が違うということはいつも思う。」以上のF夫の見解からすると、F夫は性格の違いが問題の原因だとしている。

その4日後、M子から電話が入り、「昨日F夫と話して、もう我慢ならなくなって荷物を実家に運んだ」という。「F夫は父と違うタイプで、私の決めたことにすべて従う。お金を入れてくれるだけの夫。子育てのこともあるから、それを利用して我慢しようと思ったが、イライラが出てくるようでは、このままの生活を続けるのが恐いので、別れる決心をした。」と。ついでに夢337を付けての報告であった。その夢は、「家のドアからS男と外に出ると、そこに大きな馬くらいもある真っ黒い犬がいた。なんて大きな黒犬だろうとびっくりしながら、黒い犬を見ている」というものだった。それは今のM子自身、大きな決心をしたが、大きな問題をも抱えることになるという、夢における表現であると思われる。

最後に、7月末その後の報告を得た。「こじれるところまでこじれてしまって、5月末離婚した。F夫は離婚を嫌がっていたが、仕方がないと納得した。3人の子どもは私が引き取ることになって、乳児院に預けていた子たちは、6月末に帰って来た。母が健康を回復したので力になってもらえる。日中、子どもたちは保育所に預けて、実家の店でアルバイトしている。貯金はF夫と分け、養育費はきちんと送ってくれているので、経済的な心配は無い。」さらに、「今の心配は、双子のこと。引き取ってみると、S男と比べてしまう。手をあげるなど理性を無くしてしまうことはないが、落ちこんで、きつく当たることがある。一度憎んでしまったことがあるので、またそうならないかという不安がある。普通でも子どもを憎むということがあるのだろうか。私の場合、大丈夫だろうか。」という問いかけがあった。M子の今の不安は、生活の中で、時間をかけて解消してゆくことになるだろう。M子の問題はまだまだ多いだろうが、さしあたっては、M子の母親が健康を回復して後見してくれている。

追記……1992年元旦。M子からの年賀状を手にした。そこに、最後の報告から5ヶ月を経たM子の近況が、次のように記されてあった。「私は毎日育児に追われています。A子もB子もようやく落ち着いてきました。頑張っていますので御安心下さい。」

本稿では、乳幼児虐待の母親の心理療法を通して、現代の家族関係の考察を試みたものであるが、この事例でも、乳幼児虐待は、母親の精神病理に帰するものではなく、夫婦の関係、さらに夫婦の実家の家族関係などを含む、家族心理、家族病理の問題があることが解る。たまたま、母親M子の超難産、双子の出生ということで、問題が浮き出てきた家族病理であるが、安定を保っているように見える夫婦と一子の生活でも、問題を内在させていたのである。すなわち、M子の生活上のストレスは、一時的にS男によって癒されていたが、保育所では、その一子が不適応児であったことを指摘しているように、家族関係のゆがみをすでに作っていたのである。家族関係におけるゆがんだ力動を是正してゆくことが、虐待を受ける乳幼児を救う大前提なのである。加えて、母親（加害者）の心理療法も必要となる。現在のところ、子どもに対する虐待は、隔離保護する以外に対応策のない現状であると聞く。子どもを虐待した母親たちに、自助グループ参加の試みもされつつあるようだが、問題が根深いだけに、その効果は容易なものではないと思われる。

ところで、M子の母親は、児童相談所や乳児院で、M子を過保護に育てたと叱られっ放しだったという。また、F夫については妻や子どもを守れない夫と見られていた。M子の場合、父親から自立を意識させられているが、心理的には、母親より父親に甘える父と娘の関係があり、多分に観念的な自立であった。F夫の父親は存在しているが、全く影のような動きしかなく、父親のモデルにはなり得ない人であった。また、F夫の母親は善意の行為のつもりで、結婚した子どもの家庭に深入りするという状態で、家族の中で起こる問題はこの例のように、先代から継承されたものであることが多い。この夫婦の破綻は、それぞれの実家のタイプ、そこでの育てられ方、本人の性格などが極度に違っていたため、その調整が巧くできなかったことが理由にあげられるだろう。客観的に見ると、M子の家事能力、育児能力の不足を幾分たりと補えるF夫であるが、M子の持つイメージとしての父親像、夫像はあまりにも父親をモデルにしすぎているため、終局的に、F夫を受け入れることができなかったようである。今は別れているが、この2人は、もう少し年をとり精神的に大人になってゆけば、復縁もあり得るような思いがしないでもない。しかし、現代の現実は酷しい。

筆者は、カウンセリング体験において、少産時代の子育てが、いかに難しいかを思い知らされてきた。親の在り方が、無意識のうちに、子どもの自立を阻害している傾向が増大している。親としての在り方が、育てる子孫の人生にどう影響するかを思うとき、家族の研究も、広がりと共に深みを加えてゆかねばならないことを、常に考えさせられた。この考察の最後に、母親の本質とその機能について、より根源的な認識に触れておきたい。

福島章は、「グレート・マザーと現代」として、次のような考察を述べている。

今日の日本では「母親」の問題が非常に重視され、論じられることが多くなった。それは、ノイマン流にいうなら母親が「産み・養い・保護する」《<sup>グレート・マザー</sup>良い母親》であるばかり

でなく、「抱きすくめて放さない、子を呑みこむ」《悪い母親》でもありうるからであろう。《父親なき社会》すなわち、父性の萎縮と母性の肥大は、好むと好まざるとにかかわらず、今日では世界中どこでも見られる注目すべき傾向であって、それらのマイナス面が、現代の病理といわれる登校拒否・家庭内暴力の増加や、金属バット両親殺人事件に象徴されているのではないかと考えられている。したがってわれわれは、ここでもう一度、母親の本質についてじっくり考えるべきではなかろうか<sup>10)</sup>。

ところで、筆者は「面接経過」の中で「M子の悲劇」として、S男に対するM子の母子関係を述べておいた。M子は直接暴力を振るったA子に対してのみ、《バッド・マザー》であったのではなく、すでに、S男に対して「抱きすくめて放さない、子を呑みこむ」《バッド・マザー》になってしまっていたのである。あまりにもS男に固着してしまったM子の母性に、A子やB子を受け入れるゆとりが無かったことが、M子の体験した「乳幼児虐待」だったといえるだろう。M子の起こした問題は、特異な人の起こした事件として片付けられる問題では決してないのである。

## あとがき

河合隼雄は「日本人の死生観」の中で、「進化と深化」について、次のように述べている。

語呂合わせになってしまうが、「人類のシンカ」と言うとき、進化の方向と深化の方向と、両方向で考える必要があると思う。進化というのはわかりやすい。より大きく、より強く、より速く、というように計測可能なことに関している。人間は知能を用いることによって、その科学技術を駆使して、計測可能な領域において、どんどん進歩を遂げている。このためには、人間のもつ科学の知が大いに役立っている。今後も、科学の進歩はますますその度合いを増すことであろう。しかし、果たして人間はそれだけに専念してよいのだろうか。科学の知は、それを研究する人間が対象とする現象を自己から切り離して研究するところに特徴がある。従って、その研究結果は、研究者が誰かにかかわらず普遍的な知を提供することになる。ここに科学の強さがある。しかし、科学の知は、「私」というかけがえのない存在が、この世にいかにか存在し、いかにかかわってゆくかという点については、沈黙するのである<sup>11)</sup>。

本稿は、家政学領域の家族関係学において、「深化」の方向での研究を試みた、その一報告である。筆者は、この報告の2年前、N教育大学における「家族関係Ⅱ」の講義で、試みに「家庭内暴力の事例研究」を徹底して扱い、学生の反応を見た。その反応の一つに、ある男子

学生が（家庭科専攻以外の学生も受講している）、次のような感想を述べてくれた。「家庭内暴力と聞いても、それは本当に遠い世界で起こっているような出来事ではなかった。しかし、この講義を聞き、いろいろなケースについて考えていくうちに、このようなことはどこにでも起こり得ることであると解った。それは親と子の関係だけでなく、家族内の他の関係のまずさにも関係しているものであった。この講義を受けることがなければ、家族関係あるいは家庭内暴力などは、考えることはなかっただろう。自分の家庭内に何かが起こってから初めて、家族関係を考え始めるのではないだろうか。」と。この他に、現に起こっている家族問題を解決できたという報告も一つならずあった。この場合は、事例を参考にして家族を客観的に観察し、自分の立場だけでなく、家族のそれぞれの立場を見ることによって、親との確執を解決していったというものだった。これらは、家族関係の見方や考え方を、深化させたことによる効果であったと思っている。

家庭内暴力の処置はたいへん難しい。家庭内暴力・児童虐待に対する対策は、「予防」にまず留意することが望まれる。従って、「家族関係学」においても、「予防」につながる家族問題の扱い方を考える必要があるのではないだろうか。

#### 注

- 1) 「臨床心理士の基本技術」【心理臨床学研究】第9巻特別号、日本心理臨床学会、誠信書房、1991、p. 35
- 2) 岩井寛「色と形の深層心理」NHKブックス492、昭和61
- 3) J・ヘンダーソン著 河合隼雄・浪花博訳「付録 元型的イメージとしての熊」【夢と神話の世界—通過儀礼の深層心理学的解明—】新泉社、1974
- 4) 秋山さと子「ユング心理学へのいざない—内なる世界への旅—】サイエンス社、昭和57
- 5) 河合隼雄「とりかえばや、男と女」新潮社、1991
- 6) 河合隼雄「明恵 夢を生きる」京都松柏社、1989、p. 283
- 7) 同 上、p. 290
- 8) 同 上、p. 28
- 9) C.A.マイヤー著 秋山さと子訳「夢の治癒力—古代ギリシャの医学と現代の精神分析—】筑摩書房、1986、p. 178
- 10) エリッヒ・ノイマン著 福島章他訳「グレート・マザー」ナツメ社、1982、p. 390
- 11) 多田富雄・河合隼雄編「生と死の様式—脳死時代を迎える日本人の死生観—】誠信書房、1991、pp. 258~259

